

Emergence

Volume XIII
number 01

創
発

special topic

市民社会のつながりを再生する



Emergence

Volume XIII | number 01 | Contents

エマージェンスとは「全く予期しないことが新たに起こる」ことを意味する。

もともとは複雑系の科学の専門用語で脱決定論のキーワードとして使われていたが、そのイメージを人文・社会系の分野にも応用した。

本誌を通して対話的・共感的でかつ包括的な学問とキリスト教のありかたを探りたい。

Recovered Logos

01 恢復された言葉^{ロゴス}

| 特集 | special topic

市民社会のつながりを再生する

02 有機的なコミュニティを創る 柳瀬 敬

10 「気づき」と「つながり」のプラットフォームをつくる 愛・地球博にはじまる創発型市民参加の経験から 小川巧記

20 住民流・助け合い起こし これからの地域福祉のあり方 木原孝久

31 ケア・サービスと「友愛」の倫理 稲垣久和

市民社会のつながりを再生する

日本社会で人間関係の希薄化がいわれて久しい。

OECDの統計では、日本はOECD加盟国中最も社会的孤立の度合いが高く、

困っている人を助ける社会的援助の度合いも最も低いという。

個に分断された私たちの社会で、市民の自治と連帯による社会を築いていくために必要な、

人びとのつながり、地域社会の再生はどのようにして可能だろうか。

本特集では、コミュニティ、人びとのつながり、助け合いの分野で

ユニークな実践をされている方たちにお話を聞いた。

特集をとおしてみえてくるのは、「個」に解体された欲望の主体、自己実現といった

近代社会が是としてきた価値観の修正であり、連帯を導く「ケアの倫理」の必要であるように思われる。

有機的なコミュニティを創る

柳瀬 敬

茨城県で自然生クラブというNPO法人¹の施設長を務めています。初めの頃は代表理事も務めていたのですが、運営をする理事長と現場の施設長では発想がぶつかってしまうことがあるので、いまは代表を家内に任せ、法人の運営と現場で役割分担をしています。

最初に簡単に自己紹介をさせていただきます。筑波大学で教育哲学という分野を勉強しましたが、学生時代は大学の管理教育と折り合いの悪い学生でした。教育目的の概念分析などを勉強していたのですが、大学の先生に「あれこれ考えるよりも、とにかく現場へ出て一度やってみなさい」と言われて、群馬県にある白根開善学校という私立の学校に赴任し、そこで7年半教育に携わりました。この学校は、本吉修二さんという、慶應義塾大学で教育学を教えられ、「ベストロッチャー教育賞」なども受賞されている方がつくられた学校です。私が入ったのは学校が始まって3年目くらいの、フリースクールから正式な学校になった頃で、本吉さんはさまざまな教育学の考え方を実践しておられました。私も、その頃興味のあったシュタイナー教育を実践したいと思ってこの学校に行ったのです。白根開善学校ではとても楽しく過ごしましたが、次第に学校という枠の中でやっていくことに疑問を感じるようになりました。学校では、生徒を卒業させて社会に出さなければいけません。そのため生徒が社会に適応させることを考え、それがまた教育に反映していく。学校で好きなことをやっても、最後に卒業させる段になると社会的適応を考えなければならない。当時は高度経済成長で右肩上がりの時代でしたので、社会の一員として役に立つこと、技能を身につけることを求められていました。そんななかで、ハンディキャップのある人たちの社会適応とはなんなのか、彼らが自己実現していくには、どんな場が必要かと考えて悩みました。ならば、彼らが彼らしく生きることができるよう自分をつくり、学校を飛び出して自然生クラブを設立したのが1990年でした。

90年といえば、東西の壁が崩れ、ソ連が崩壊していく非常に不安定な時代であった一方、バブルの最盛期で、土地を持っていれば値上がりして儲かるという浮かれた時期でした。そのような中で、自分は何をしたいのかと自問して考えたことは、人間の生のベースになる農業からスタートし、そこからいろいろなことを再構築していこうということでした。しかし、この頃は海外か

本特集2〜30頁は、2009年1月から4月に行われた共立基督教研究所主催のキリスト教公共福祉研究会の記録である。掲載にあたり加筆・再構成を行った。

1 | 自然生(じねんじょ)クラブ…茨城県の筑波山麓を拠点に、知的ハンディキャップのある人々との共同生活を営みながら有機農業を中心とした環境運動に取り組んでいるNPO法人。太鼓や創作楽器、絵画を使った表現活動を行い、ヨーロッパを初めとする海外での公演活動や芸術団体との交流などを行っている。2010年、国際交流基金「地球市民賞」を受賞。

▶ <http://www17.ocn.ne.jp/~jinenjo/jinenjo.htm>

ロゴス 恢復された言葉

2010年1月29日の第174回国会における鳩山首相施政方針演説は「いのちと新しい公共」をテーマにして力のこもったものであった。昨年(2009年)10月26日の首相所信表明演説での「友愛政治の原点」を、さらに深めた内容だ。戦後にこれほど高い政治理念を掲げた首相はいなかったのではないか。筆者も「友愛」と「連帯」の公共哲学をテーマにしてきたのだから、それと重なる理念を掲げた人物が首相になったことは、それ自体で確かに喜ばしい。ただ、本来は市民の自治から出てくる「新しい公共」を、政権の頂点にある人物が「上から」説いたり、友愛という倫理観を訴えたり、ということはどういう意味をもつのだろうか。今日、ふつうの市民の生活世界の現実には、それらがほとんど見えてこない、ということであろう。もし、公共性や友愛が市民に共有された現実となっているならば、それを説く人物が首相になっても新鮮味はない。新鮮味があるということは、逆に、現実はそのでないということなのだ。または、一党支配の長い間の政治で市民から剝奪されてしまった、ということである。市民の間にこの演説を共有できるほどの内実ある思想と生き方、特に「友愛」がまだ共有されていない。だから、格調高い演説の中身は、次の「政権交代」とともに簡単に崩れ去る可能性がある。

政治は市民生活の外形を補完的に整えることで、内実の形成は市民各層や地域政府にそのまま委ねられている。本誌のバックナンバーに特集してきた内容が首相演説と多く重なっている。だから「地域主権」は、それを掲げるだけでなく、現実には中央からの権力移譲と財源確保を実践しなければ、絵に描いたモチである。また「自立と共生を基本とする人間らしい社会を築き、地域のきずなを再生するとともに、肥大化した「官」をスリムにすることにつなげる」ことによる「新しい公共」の首相演説の確立は、公私協働によってしかできない。「私」の側が率先してそれをするためにはNPO等の「寄付税制」の確立だけではなく、企業での男女共なる雇用の確保と同時に、労働時間短縮をしなければ実現しない。いわゆるワークシェアリングが当たり前の社会になるには、市民の間に「友愛」のモラルが不可欠だ。

「子育てを社会全体で応援する」、また「一人暮らしのお年寄りが、誰にももとられず孤独な死を迎える」ことを防ぐには、社会保障制度といった「制度」面のインフラ整備と同時に、地域のネットワークが欠かせない。そこにも「連帯」と「友愛」のモラルが必要だ。地域主権と民間中間集団の自律性の両方を包含する「領域主権」という考え方、これを主張してきた筆者としては、市民の側の自治が今まで以上に必要になっていると感じる。そうでなければ「政治主導」「お上依存」のかたちで友愛社会をつくる、などといった転倒した発想になってしまい、次の政権交代とともに、すべては元の本阿弥に帰する、ということになりかねない。

だから、「友愛」や「新しい公共」は、市民のなかにわずかずつでも確実に育ちつつある、そのことを発掘しなければならない。本誌の特集はその点を考慮した。

コミュニティには人間らしい支え合いが欠かせない。それを本当に教えてくれるのはハンディキャップをもつ人びとであり、逆に“健常者”のほうで競争社会を生き抜いてきた分だけ失っている[柳瀬敬氏]。「万博」というとこれまで国家や企業の力の発揚というイメージがあるが、それが市民参加というかたちに変わってきた[小川巧記氏]。市民の内実も実に多様である。その市民の日常は地域にあるわけであるが、生活現場としての「ご近所」の助け合いが、女性を中心に現実には担われている[本原孝久氏]。最後のエッセーは、これらを「友愛の倫理学」としてまとめようと試みた。

[稲垣久和 | 共立基督教研究所所長]



fig.01
自然生クラブの太鼓の演目
「創作 田楽舞い」

伝統芸能の一つ田楽舞いに仮面をつけた寸劇、相撲などの趣向を取り入れた舞台。田植えと稲刈りの時期に行われる「田楽の集い」には実際に田んぼの舞台で披露され、多くの人が訪れ、海外公演でも演じられている。



fig.02
石蔵を活用した田井ミュージアムで
自由な表現をする参加者たち



fig.03
田んぼで泥を用いた創作活動



fig.04
即興ダンスによる表現ワークショップ

2 | アール・ディファレンシエ (art defferencie) …ベルギーの芸術団体「クレアム (Creahm)」によって提唱された概念。知的ハンディをもつ人の固有の世界認知や性格特有の表現をアートの領域として認めるもので、自然生クラブでは、田井ミュージアムを拠点としてアール・ディファレンシエを実践している。「比較する」という行為から生まれる「違い」ではない、固有の属性としての「違い」というニュアンスを含むフランス語を使用している。

ら農作物が大量に入ってくるようになり、日本はモノを売って外国から農産物を買えばいいという論調が盛んでしたので、周りの人たちからは「農業では食っていけない」、「どうして今頃農業なのか」と言われました。

ハンディキャップをもった人たちを受け入れて小さなコミュニティをつくり、そこで農業を営みながらいろいろな活動をしてきました。当時はNPOという発想がなく、最初、農業法人にしようか、社会福祉法人にしようかと、クラブの中でもいろいろな意見が出ましたがどれも当てはまりません。農業法人だと、ハンディキャップをもった人たちのペースに対応できない。また、自分たちは農業や環境運動をしたいので、社会福祉法人でもやはり当てはまらない。非常に納まりの悪い状態が10年くらい続きましたが、2000年に特定非営利活動促進法が制定されて、やっと私たちの活動に合うかたちになりました。

私たちの活動を知っていただくために、香港のテレビ局が制作した番組を見ていただきます。

Arts Unlimited, Inner Nature (Radio Television Hong Kong, 2007) の概要

2007年4月、香港とベルギーから、知的ハンディキャップのある人たちのグループが日本のつくば市を訪れ、自然生クラブのメンバーたちと10日間アート交流「アーティスト・イン・レジデンス」を行った。彼らは自然の中で生活を共にし、絵画制作、舞踏、太鼓演奏、彫刻づくり、農作業を行った。映像は参加者がにぎやかに自己紹介をする様子から始まり、プロジェクトのプログラムの進行に、柳瀬氏らのインタビュー、つくば山麓の自然や田園の映像が入り混じるかたちで構成されている。

| クラブ名の由来 |

柳瀬「自然生というのは野山に自生する山芋のことです。山芋は土壌によってそれぞれ違ったかたちに成長します。自然界では、植物はその場所から自分たちに必要な栄養素を見つけて成長します。こうした成長の仕方は人にも当てはまります。世界中にさまざまな人がいますが、どの人もその人らしくすばらしく自分を表現できるのがよいと思っています。ですから山芋と自然のスピリットにならって、私たちのコミュニティを自然生と名づけたのです」

| アール ディファレンシエ |

2日目、参加者は自然生クラブの拠点の一つ、石蔵を活用した創作活動をする田井ミュージアムにやって来た。ここでは、専門的な技術を習得するように、誰か専門家が彼らを教えることはない。自然生クラブは、参加者たちが自ら試みて自分を表現する方法を見出すように機会を提供している。参加者たちは、お茶を飲んだり談笑したりしながら、自由な表現を楽しんでいる・fig.02。これが彼らのアール ディファレンシエ (art differencie)・2である。私たちは差異を認めると言いながら、社会は唯一つの物差しを当てはめている。芸術は一部の専門家がつくるものではない、すべての人がその人の芸術をつくり出すことができる。

| 泥の彫刻 1 |

3日目、彼らは春を迎える前の田んぼで、泥を使い創造活動をする。自然からのインスピレーションを感じ、参加者が創造性を自由に表現する。最初に柳瀬氏が「周りの泥を僕らが立っているところに高く積み上げよう。こんなふうにくねてボールにして」と説明して彫刻づくりが始まる。皆が自由に積み重ねたり、投げつけたり、叩いたり足で踏んだりして固めていく。地域のおばあさんや子供も参加してみな楽しそうに作業していく。・fig.03

| 表現ワークショップ |

シアターでは、即興の踊りの活動をしている山本早苗氏によるワークショップが行われた。・fig.04
山本氏がするいろいろな姿勢を皆がまねる。山本氏は、自然生クラブで「表現ワークショップ」

を開催している。彼女は、コミュニケーションと相互作用によって参加者の隠れた内側の世界が表出されるよう即興ダンスを用いている。

山本「彼らの内面の世界は身振りによって表現されます。ワークショップを重ねていくとその人なりの身振りが出てきます。彼らの踊りは、踊り方を練習したのではなく、自分の感性や内面を表出したものなのだと思います。私は専門家として彼らが彼らの方法で表現することをサポートしたいと思っています」

参加者たちが音楽に合わせて踊っている。一人ひとりが自由な表現をしているが、全体に連携がとれているように見える。

| 農作業 |

参加者がハウスで農作業をしている風景。

柳瀬「私たちメンバー全員は毎日働きます。ある人たちは、私たちが世界から逃避し、隔絶して生きていると思うかもしれません。一般社会の価値観は物質主義と適者生存ですが、私たちはそれに同意できません。私は人間的であることを求めてここにやって来ました」

| 泥の彫刻 2 |

泥の彫刻づくりが続けられ、やがてユニークなクレイアートが完成する。

柳瀬「土はすべての生命の源です。この創造のプロセスは、参加者たちに、環境や自然と命が相互に影響し合う機会を提供します。アール ディファレンシェが求めるのは成果ではなくプロセスです。ふだんは田植えをする場所で、ある時は泥を使って創造活動をすることで、私たちは自然の中で生活も遊びもしているのです。ハンディキャップをもつ仲間たちは、素晴らしい人たちで、彼らにはほんとうに驚かされます。彼らは私に多くのことを教えてくれています」

| 即興ダンスの発表会 |

参加者は、聴衆を前にステージで即興のパフォーマンスを行った。それは練習、リハーサルなしの即興で行われている。彼らは彼らの内なる声を探り、ステージで感性のままに身体を動かし表現している。幻想的な音楽から、激しい現代的なリズムに変わると、彼らもそれに合わせてパフォーマンスを展開する。最後はバッヘルベルのカノンにのって、数人が輪になりながら踊り、パフォーマンスが終わった。

| 打ち上げパーティー |

皆が生き生きと楽しそうに、食べ、飲み、交流している。

また即興のパフォーマンスが始まった。●fig.05

| 筑波大キャンパス |

交流の終わり頃、彼らは筑波大学のキャンパスにやって来て、芝生で太鼓や笛に合わせて踊り、また泥のアートを制作した。

柳瀬「私はみんなが幸福を見出してほしいと思っています。誰でも充分満たされた人生を楽しむことができるのです。このアートプロジェクトの目的は、真実の自分を見出すことです。私たちはそれをアール ディファレンシェと呼んでいます。私は私自身のアートをもっており、あなたはあなた自身のアートを持っています。私たちは異なっており、それは素晴らしいことです。なぜ私たちは比較するのでしょうか？」

映像に加えて、もう少しふだんの私たちの活動をご紹介します。

自然生クラブは、fig. 06の一軒の農家からスタートしました。明治の初め頃建てられた築100年ほどのお屋敷で、いまはグループホーム「山の家」として使用しています。

fig. 07は、グループホーム「森の家」です。男の子と女の子と一緒に生活するのが自然であろうと、最初から一緒に、いまは7人が生活しています。



fig. 05
プロジェクトの打ち上げパーティーの様子



fig. 06
グループホーム「山の家」



fig. 07
グループホーム「森の家」



fig. 08
有機農栽培をしている野菜畑



fig. 09
アイルランド、キャンプヒルでの公演風景



fig. 10
サッカーチームのユニフォーム

私たちは有機野菜をつくっています。無農薬ですので、畑は草ボウボウですが、みごとになかばちやがたくさん採れます・fig.08。出来た野菜は、市場にも直売所にも出さず、直接100件ほどの家庭に届けています。つまり、コミュニティのための農園ということです。「農業では食べていけない」と言われましたが、食べることは人間の基本であるのだから、その活動で食べていけないわけがないと思ひましたし、実際食べていくことができています。その方法の一つが、市場を通さず、消費者と生産者の関係を一つのコミュニティと考えてその中で循環させることです。お金がないときでも野菜を食べ、交換経済の中で暮らしていくことができます。

田んぼでは無農薬米をつくっています。無農薬でつくるのはすごく大変なのですが、紙マルチを敷いて雑草を抑える紙マルチ農法をしています。ふつう、機械を使えば1枚の田んぼを1時間くらいで田植えが終わってしまうのに、大勢の人が紙を敷きながら田植をしているので、近所の農家の人たちからは一体なにをやっているのかとびっくりされます。生産性を求めるのならこんなことはしないで済むのですが、皆で作業することに別の意味も生まれてきます。田植えの後はお祭りもやります。稲刈りもただ稲を刈るだけでは面白くないので、皆で大きな丸太の舞台をつくり、午前中の稲刈りが終わってお昼過ぎになるともうドンチャン騒ぎになりました。農家の人たちが見ると、田圃で遊んでいるんだろう、ということになりますが、後でお話するように、田んぼという場を自由にしてしまうのです。

田んぼではアイガモ農法も採り入れています。アイガモは1匹が人間について来るようにすれば集団で後に続くのですが、まだうまくできず、あちこち行ってしまいます。インドネシアあたりでは、棒一本を持って行くときちんとついて来て、田んぼの真中にその棒を一本立てて人間はいなくなっていまい、夕方に棒を持って家に帰れば皆帰って来るそうです。大きくなるとアイガモを食べるのですが、つ必ず前に学生さんやメンバー皆に抱いてぬくもりを感じてもらいます。そして血抜きをして食べますが、最初はガタガタと震えながら作業をします。でもごちそうさまをする頃にはみんなニコニコして、「食べものを食べるというのはこんなことだったんですね」と感動して帰っていきます。

また、ひまわりも育てて油を搾っています。最初はそれでトラクターを走らせようと思っていたのですが、実際にやってみると、苦勞してたくさん絞っても一升瓶1本になるのがやっとだったので、いまは大切に食用に使っています。最後の一滴まで舐めながら食べていますが、それからすると、石油をジャブジャブ使っている今の生活は一体なんなのかと思ひてしまいます。

先ほど映像に出てきた田井ミュージアムは、大谷石で造られた石蔵です。幸い、去年ここを買い取ることができ、自分たちのホームグラウンドが出来ました。2部屋あるうちの一つをアトリエにしています。ここで絵を描いたりしますが、何を描こうといったことはなにも言いません。最初メンバーも何を描いてよいか分からず困っていましたが、いまはアトリエに行ったらすぐに描き出し、なにも考えずに何枚も何枚も描きます。もう一部屋は劇場になっていて、太鼓をしたりダンスをしたりします。fig.09は、アイルランドのキャンプヒルにあるシュタイナーの共同体の劇場で演奏したときの様子です。向こうの人たちは一緒に叩きたくなるらしく、終わった後「なんで自分たちにも叩かせないんだ」となだれ込んできました。私たちの公演はたいてい二部構成になっていて、二部は会場も巻き込んでお祭になります。

最後はおまけです・fig.10。彼らがサッカーをしたいというので、では何をしたらいいのかと考えて、まずユニホームを作りました。カッコいいでしょう？ みんなその気になって楽しみました。1点を入れただけでもすごい喜びようで、ワールドカップで優勝したような大騒ぎになりました(5対1で1点入ただけなのですが)。それが去年初めて1勝しました。うちより弱いチームがあつて、わざわざ相手のチームを励ましに行きました。

心・体・場所・時間・モノ・お金を自由にする

先ほど見ていただいた泊り込みのアーティスト・イン・レジデンスでは、ベルギー、香港、自然生クラブ、それぞれのメンバーが集まって非常に宇宙的な世界が出来ていました。ベルギーの人たちはフランス語で喋り、それに平気で中国語で答え、また平気で日本語で喋っているのですが、それでなんとなく通じているのです。言葉を越えてしまうというか、一体になっているのです。映像ではたまたまダウン症の青年たちが前面に出てきていましたが、彼らのもっている世界観・宇宙観というのは、私たちの頭で考えたがんじがらめの世界とは違い、とても柔らかく自由なものです。むしろ、私たちのほうが彼らと一緒にいることで自由になれる。

夜ダンスを踊り出したときも、まったく打ち合わせなしにコラボレートして、その場でコミュニケーションしながらどんどんつくっていく。身体的にもそういう自由さがあります。私たちのワークショップには、いろいろな人が来られますが、いきなり「では一緒に踊りましょう」と始めると、大抵の人は踊れません。心も体も不自由になっていて、体は動かないし、表現もできない。それが私たちの仲間と活動すると、幸せなことに、どんどん解放されていくのです。私たちの仲間もかつては施設や学校にいたころがあり、すぐに自由に表現ができたわけではありません。自由な場所、自由な時間を設けることで、初めて表現できるようになってくる。そこで表現活動することは、彼らにとってまさに生きていることであり、自立することだと思います。それは経済的な自立とは違う意味で、自分らしく表現することが彼らの自立であると私は思っています。そのための心と体、時間と場所を、皆でつくっていく必要があります。

このようなことは人間の社会一般でも同じでしょう。昨年(2008年)亡くなった自然農法の福岡正信さんが、自然農法とは種を蒔いてから放任することではないと言われました。すでに人間が関わり、畑というものがあること自体それはもう放任されたものではない。そこでいかに自然形に近づけていくかのたゆみない活動なのだ、と言われています。人間にも同じことが言え、心・体・時間・場所を自由にしていけない限り、何もしなければ不自由なままです。

映像に田んぼの中でアート活動をしていましたが、農家の人にとって田んぼは聖域で、そこで遊ぶことはふつうは許されません。しかし田んぼでアートができれば、違った意味で田んぼというものが自由になり、公共になっていく。また、田井ミュージアムは、使われなくなっていたかつての備蓄米を貯める蔵を私たちが借りて、そこを公共の空間にしていきました。ただの石蔵ですが、そこを私たちが自由にし、公共的な空間にしていくことで場所が生かされていく、新しい意味付けがなされていくのです。いまの公民館や公の場所は、皆のものであるはずが、現実には「誰のものでもない」場所になっています。ヨーロッパでは必ず劇場付きの劇団やオーケストラがありますが、日本の公共施設は占有しないことが大前提になっていて、結局誰のものでもなくなっている。石蔵を自分たちで運営できるようになったとき、私たちは皆の場所にすることを目指しました。そのために、それぞれが責任をもって占有するようにしています。夜になると、他の劇団の練習やコンサートなど、いろいろなことに使われていますが、皆に「どんどん手垢をつけてください」と言っています。「手垢をつける」というのは、汚すという意味ではなく、劇場やアトリエを皆で愛し育てていきましょう、自分のもののように大切にしてくださいということです。それは今の日本の公共施設とは違う発想です。

モノを自由にするということもあります。映像の中で太鼓を叩いていましたが、日本の太鼓は、たいてい祭礼のために神社やお寺に仕舞われていて、誰でも触っていいものではありません。私たちは、それを自由に叩けるものにしようと開放しました。高価なので、傷ついたり壊れたりしますが、破れたら張り替えれば良いと割り切って、皆で好きに叩いています。

お金について、びっくりした経験があります。グループホームをつくるときにNPO法人でお金を

借りて建物を建てましたが、銀行は補助金を受けている事業には融資ができないと言われました。補助金は公のお金ですから私は問題ないと思っていたのですが、銀行からすると、担保にできない(つまり自由に転売できない)物件は不良債権になるのだそうです。グループホームとして使うことは間違いなし、補助金を受けているので他の用途に使うこともないので、まさに公共性の強いものなのですが、担保にならない以上融資はできないというのです。そんな時にお金を融資してくれるNPOバンクがありました。私たちを「未来バンク」という出資組合が助けてくれました。そこでは、NPOや個人が加わってお金を集め、それをまた公益性のあるNPOや個人、団体に貸し出しています。こうしたことも、不自由なお金を自由にしていくことではないかと思っています。私たちの活動は、このように不自由になっているものを解放していく作業ではないかと思っています。現代社会にあって、脱構築・再構築を実践しているともいえます。

公共を生み出す

公共というものは、最初からなにか公共的なものがあるのではなく、私たちが公共にしていくなかで活動ではないかと思っています。私たちも、公共をつくっていくという発想で自分たちの活動をしています。私たちはこれをNPOとして活動しています。法的な制度であるNPOに対して、NGOという呼称がありますが、私はこのnon governmentということが大事だと思っています。日本では社会福祉協議会や政府関連の事業をしている公益法人なども第三セクターに含まれていますが、それらはNGOの活動ではありません。私たちは、さまざまな海外のグループとつながりをつくっていますが、政府とは関わりなく直接の関係をつくっています。こうした政府系ではないネットワークが膨らんでいくことで、もっと自由なつながりができると思います。以前は、海外で活動しようとする場合、渡航費や滞在費などで国の補助がなければ国際交流はできないと思い、いろいろな財団にお世話になりました。最近はインターネットで、会話をするように直接交流をもつことができます。私たちにとって、近隣の福祉施設は交流が少なくかえって遠い存在なのですが、海外のアートグループとはすぐ情報交換できるし、お互いに今なにをしているのか知っていて距離がありません。先ほどの映像に出てきた香港の人たちからも、TVを見て「とても面白かった」とか、「日本に行ったときは行ってもいいか」などとメールが飛び込んできます。そうやってネットワークが広がり、時間と空間の自由さが増していきます。このようななかで、governmentを補完する活動ではなく、governmentに代わるネットワークができないだろうかと思っています。

[Discussion]

● | 参加者の発言

●——自然生クラブはどのような組織になっているのか。

柳瀬——私たちはオーガニックな組織をつくりたいと考えている^{●fig.11}。利用者にあたる人は14人、スタッフは非常勤を含めて9人いるが、その人なりのいろいろな関わり方ができるという意味で“クラブ”と呼んでいる。

●——公共性の定義にオープンネス(外に開かれている)とコモナリティー(共有性)があるが、プロジェクトに参加した人たちは、言語を超えたある種のスピリチュアリティのようなものを共有しているように感じた。また銀行の話が出ていたが、市場とはすべてを私物化してしまう空間で、その市場原理が拡大される方向にきていた。私たちにはそうしたものを解放する作業が必要とされていて、NPOバンクのようなものを市場の外にたくさんつくる必要がある。それが資本主義を相対化していく視点になるし、それは自給自足とも深く関係しているだろう。そのように、公でもなく私でもないかたちでスピリチュアリティが共有されることは、どのようにしたら可能だろうか。

柳瀬——先述したように、公共はもともとあるものではなくつくり出していくものだと考えている。お金も握りしめている限り私のものだが、使い方次第で公共のものになる。田んぼや山も、ある手続きをすれば私有になるが、それを公共にすることもできるダイナミックなものではないか。スピリチュアリティも、出会った初めから共感するスピリチュアリティが生まれるのではなく、なにかをすることで初めて共有性が生まれてくるという力動的なものではないか。

●——近代社会は公平さを人工的につくってきたところがあると思うが、それが一人ひとりを管理するようになり、私たちはそこから解放されないと人間らしさが取り戻せなくなっている。ハンディキャップをもつ人たちはスピリチュアリティを豊かにもっていると感じるか。

柳瀬——感じる。元凶は「時は金なり」で、私たちは自分のもっている人生を計算している。しかし彼らには金持ちになりたいという意識が全然なく、自分の時間を豊かに生きている。私も彼らと時間を共有することでそうした時間を取り戻せているのだと思う。

●——NPOを立ち上げたいと考えているが、NPOとしての活動と自立支援法による作業所の活動ではどのような違いがあるのか。

柳瀬——NPO法人であれ作業所であれ、一つのツールに過ぎないので、制度からは自由でありたいと考えている。表現活動などは、制度のなかでは社会適応訓練やアートセラピーということになってしまうが、それはアートを機能的に捉えているため。私たちはセラピーなどする気はなく、描きたいから描いているだけである。一緒に農作業や表現活動をするのも、同じ働く者同士、同じ作家同士として活動している。補助金は多いほうがよいので、制度は勉強して活用するが、事務的なことに時間を費やすより現場で楽しいことをしたほうがよい。

●——精神障害をもった方もそうでない方も誰でも来られる場所に、ということでクラブハウスをしているが、一緒に集まって活動してはいても皆がバラバラな感じがしている。先ほどのスピリチュアリティの共有のようものはどのようにしたら生まれてくるのだろうか。

柳瀬——面白いことをするのが一番だと思う。誰も面白くないことはやらない。そのために、サポートする・されるという関係を早く捨てて、「皆で面白いことをしよう」というのがよいのではない。対価NPOのようなビジネスをするのも楽しい。私たちはバザーが大好きだが、それはお金儲けというよりも、作ったものが売れるのを見ることや、来た人とやり取りすることが面白い。そういう面白い、楽しく自由になれる環境をつくるのが福祉の仕事で、福祉の世界はどこか面白くない、法律に縛られていて堅いという意識を捨ててしまうことが必要。ただ、しんどくなってきた



fig. 11
自然生クラブの組織図(通称“ヤマイモ”)

たらずぐやめることも重要。生命体は常に細胞が死んで、12年間くらいで全部入れ替わるというが、オーガニックな組織も常に壊れていないと新しくならない。私たちは、毎朝30分くらい侃々諤々と議論する。誰かが突然「今の政治がダメだ」と言い出したり、「定款を変えなくちゃ」と言ったりして、結論が出ないことを議論する。しかもそれを蒸し返すことが大事で、この前決まったことも納得がいかないと蒸し返す。するとその間に勉強してきた人がいたり、皆の考えが変わっていたりする。私たちはまとめることがトラウマになっているが、生きた組織はまとまるわけがないし、ダイナミックなほうがいい。

●——生きた、現場にあった組織という点から日本の福祉を考えると、どうしてもそのサイズが問題になる。スウェーデンは福祉国家といわれるが人口900万人ほどで東京都より小さく、合意形成も、地域に根ざした施策も立てやすい。それに対して日本は1億2000万人もいて大きすぎる。あまり国に頼り過ぎても自分たちの必要に合わないのは当然で、区のような身近な規模でオーガナイズしていったほうがよいのではないか。

柳瀬——そう思う。今の社会はマクロ経済に振り回されているが、私たちはミクロ経済をきちんとつくりたいと考えている。地域通貨や、近隣での物々交換、リサイクルなどは皆ミクロ経済だが、それらは市場を通さないのが国の統計であるGDPには表れない。しかしGDPが下がっても自給率は下がらず豊かに暮らせる仕組みがある。コミュニティー農園や、アートや稲作で地域の人を巻き込んでいるのもその発想にもとづいている。

●——教会で在日ブラジル人の支援を始めたが、言葉の問題もありむずかしさを感じている。

柳瀬——一つの方法は、NPOなどの中間支援団体を使うこと。言葉の問題を抱えていればその言語で話しを聞いてくれる人を抱えている支援団体を頼む。電話をかけまくってもいいし、とにかく抱え込まない。そうやってネットワークしていき、一つ解決すると、そこで関わった人がみな次の事例の社会資源になる。それを地域がどれくらいストックできるかがカギになる。

●——ホームレスの人たちへの給食活動をしているうちに、支援を受けていた人たちが周辺の清掃をするようになり、近隣から感謝されるようになった。彼らが役割を果たすことをさらに進められたらと思うが、なにかアドバイスがあれば伺いたい。

柳瀬——フードバンクの活動をするグループを通して、ホームレスの人たちが私たちのところに農業体験に来たことがあるが、皆が「わしもここに住む」ということになってストップし、いまは農産物を山谷で活動しているグループに託すだけになっている。山谷には、高齢化のほかにはハンディキャップをもっている人たちが多く、ホームレス支援以上にそちらのケアが必要だろう。そうした支援をしている人たちもいて、彼らの活動を見ていると、仲間同士の中からリーダー格の人が育つと、同じ生活をしているので、仲間を非常に上手にまとめる。そのようなピア(仲間)による支援をつくっていくのがよいのではないか。

●——水田での創作のような活動は都市でもできるのか？

柳瀬——浅草の児童館と交流していて、私たちが“解放軍”として出かけて行って公園でアートをしたりしている。方法論としては、アートでコミュニティーをつくっていくコミュニティーアートという手法。そういう点でアートは非常に大きな力がある。例えば、山谷付近の落書きされている壁を見つけて、その管理もきちんとやると提案してそこに絵を描くの児童館がやっている。

「気づき」と「つながり」のプラットフォームをつくる

愛・地球博にはじまる創発型市民参加の経験から

小川巧記

万博開催までの経緯

2005年に「愛・地球博」¹という日本では35年振りの万国博覧会が開催され、そこで市民参加プロデューサーという立場で仕事をさせていただきました。現在(2009年2月)は、横浜の開港150周年を記念した「開国博 Y 150」の総合プロデュースをさせていただいています。ふだんはイベントのプロデューサーや広告の制作を手がけるかわら、オイコス・チャペルという小さな教会の牧会もさせていただいています。私は現場の人間ですので、本日は学術的な研究ではなく現場で経験して学んだことを分かち合わせていただければと思います。

愛・地球博では、万博として初めて市民参加事業を行いました。後ほど詳しくご説明しますが、万国博覧会というのは国家を基本的なスキームにしている、市民や企業は二次的な存在でした。そもそも万国博覧会が始まったのが1851年で、当時は国民国家が台頭する時代ですから、国家が中心に据えられていました。それ以来150年間、国中心の万博の歴史のなかで、愛・地球博で初めて市民参加が行われました。そこに携わせていただいて、さまざまな課題も出てきましたので、その経験を横浜に引き継いでさらに発展させようとしているのが現状です。

愛・地球博は、1994年にパリの博覧会国際事務局(BIE)は、新しい万博のあり方として「課題解決型万博」という規定を決議しました。それまでは1851年の第1回ロンドン博以来、ずっと従来の国家のスキームで開催されていたのですが、事業としてうまくいかないという状況があり、新しい万博のかたちを模索するためにこの規定が決議されたのです。従来の万博は、工業的な製品や技術などのプレゼンテーションの場でしたが、それに対して、万博を現在世界が抱えているさまざまな問題を解決する場として機能させようというのがこの決議の趣旨でした。これを初めて実施したのが、21世紀最初の万博として開催された愛・地球博で、日本では1970年の大阪万博以来、35年ぶりの万博でした。

万博のテーマには、縦軸に中沢新一さんによる「自然の叡智」が、横軸に木村尚三郎さん(愛・地球博総合プロデューサー)による「地球大交流」が据えられ、全体のコンセプトとしては「持続可能な発展をめざして」が大きく掲げられました。この万博は2つの課題をもってスタートしました。一つは、この万博から「持続可能な開発のための教育の10年(ESD: Education for Sustainable Development)」を開始すること。これは小泉首相が2002年のヨハネスブルグサミットで、2005年からの10年をESDの10年とすると提唱したことを受けたものです。もう一つは、万博史上初の市民参加を実現することでした。

当初、今回の万博は「絶対に失敗する万博」と言われていました。私もプロデューサーを引き受けたとき、多くの方から「やめた方がいい」、「職を失いますよ」などと忠告されました。しかし、以前に「早稲田エイジングメッセ」などで高齢化社会に関連した市民参加に関わってきた経緯があり、今回も市民参加のプロデューサーとしてぜひと言われたこともあって、お引き受けすることになりました。結果的には、入場者が予想を遙かに上回り、収入も100億円ほどの黒字になって、「久しぶりに成功した万博」などと言われましたし、BIEのロセルタレス事務局長からは「成功の鍵は市民参加にあった」という言葉をいただきました。

「絶対に失敗する」と言われた理由は、ご存じのように開催前に多くの問題があったためです。

1 | 2005年3月25日から9月25日まで、愛知県長久手町の「長久手会場」、豊田市と瀬戸市にまたがる「瀬戸会場」の2箇所で開催された21世紀初の国際博覧会。正式名称は「2005年日本国際博覧会」(略称:愛知万博、愛称:愛・地球博)。会期中の延べ入場者は2204万9544人で、当初予定の1500万人を大幅に上回る来場者があった。



fig.01-1
長久手会場



fig.01-2
瀬戸会場

当初のプランは1988年のバブル期に立てられたもので、550haほどの海上の森^{かいし}を予定地にしていました。ところがそれに対して、会場をつくるのが自然破壊になるという反対運動が起きました。この付近では、親子で自然観察や田植をしたりする「海上の森自然観察会」などの市民グループが活動していました。そのお母さんたちが、「なぜ私たちの場所が万博の会場で壊されなければならないのか」と反対の声を挙げたのです。当初は、彼女たちが県に陳情を行ってもまったく無視される状況だったのですが、海外にも情報が発信されるうちに、国際的な環境3団体といわれる「世界自然保護基金(WWF)」「国際自然保護協会」「日本野鳥の会」がBIEに「開発型万博を許していいのか」というクレームを入れました。それを受けてBIEが、日本の通産省(当時)に「あなた方は地雷の上に乗っています」といって批判的な声明を出したのです。これにより実行主体である財団法人日本国際博覧会協会も活動が止まってしまう、一時は中止がささやかれるまでになりました。

そこで協会は、最後の手段として愛知万博円卓会議というオープンな会議を開きました。そこには、賛成派・反対派双方の市民、環境派の市民、主催者側である当時の通産省・建設省・国土庁などの省庁関係者、そして愛知県や名古屋市などの行政が参加し、フラットな会議で検討が行われました。そこで推進派の市民から提案されたのが2会場方式でした。海上の森の入り口にあたる瀬戸会場付近はすでに大学のキャンパスもあって人の手が入っており、長久手会場もすでに愛知青少年公園があるので、新たな自然への負荷が少ない。この2kmほど離れた2会場をゴンドラでつないで使おうというものです。それをBIEに提出したところ、市民合意ならば、ということでOKが出て、この万博は再スタートをしたのです。

つまり、市民参加型という性格は、このように最初の立ち上げからあったわけで、検討会議のメンバーであった吉見俊哉先生(東京大学教授)も「創造型の市民参加」という言い方をされていました。多くの市民参加は、反ダム、反原発のように反対に動くものですが、国家事業を再生させたという意味で、新しい市民参加が生まれたのではないかと思います。

なぜ万博で市民参加なのか

この万博では、協会事業として5つの市民参加事業が実施されました。

1つめは「地球市民村」という、世界中のNGOやNPOが参加するパビリオン群をつくりました。これも万博では新しい試みでしたが、最終的に100ほどの団体が参加しました。一つ一つの竹籠がパビリオンになっていて、いろいろなNGO・NPOが自分たちのプレゼンテーションをして、1ヶ月ごとに交代していくというものでした。「国境なき医師団」が彼らのキャンプ場を再現したものもあり、これは来場者に強いインパクトを与えました。

2つめは「EXPOエコマネー」という地域通貨です。これは環境マネーで、例えばレジ袋を断ったり、公共交通機関で来場したり、環境関連のフォーラムやコンテンツに参加するとポイントが付くというものです。ポイント交換には2つの方法があって、一つは自分にご褒美をあげるという意味で、万博の協賛企業からちょっとした商品が貰えます。もう一つは貯まったポイントを寄付するとアフリカに植林をする資金になります。興味深かったのは、ポイント交換をした25%(60万人)が後者の公共的な貢献を行うほうを選んだことです。

3つめは「森の自然学校」「里の自然学校」です。愛・地球博は森や里山のなかで開催したようなものですので、「周辺の森や里山を知ろう」ということで、来場者を自然のなかに案内するインタープリターが同行して、森や里の自然を体験するという企画です。自然に負荷がかかり過ぎないように人数制限を設けましたが、それでもかなりの方が参加されました。

そして4つめが「ボランティアセンター」です。今回の万博の特徴の一つは、過去の万博に比べ

てボランティアの比率がとても高かったことで、延べ10万人が参加しました。彼らは自発的なボランティアを展開し、途中から協会が用意したマニュアルは完全に無視されて、日々自分たちでマニュアルをつくりながら展開していきました。

最後の5つめは「市民プロジェクト」です。これが創発型の市民参加によるプロジェクトで、私が中心になって担当したものです。先の4つは従来も行われてきたスキームなのですが、この市民プロジェクトは初めてのスキームになります。これは瀬戸会場で実施されました。先ほどお話ししたような経緯もあって、各国のパビリオンがある大きな長久手会場と、日本館、愛知県館、市民パビリオン、および海上広場のある小さな瀬戸会場に分かれていましたが、市民プロジェクトは、瀬戸会場の市民パビリオンと海上広場を中心に行われました。

この仕事を引き受けるとき、よく周りの人たちから「いまさらどうして万博をやるのか」と言われました。経済学者の野口悠紀雄先生からも「万博なんて時代錯誤だからやめなさい」と言われました。先生からみれば、いまのインターネット社会では情報の交換・交流が充分にできるのだから、いまさらリスクをおかし、場所を切り拓いて人を呼ぶようなことをする必要がないということでしょう。そのような万博の仕事を受けるにあたり、それなりに腹を括らなければいけないと考えまして、万博とは一体どのようなものか私なりに考えてみました。その結果、「万博は、時代のエンジンを見せるショールーム」であるとシンプルに規定してみました・fig.02。このような視点からみると、1851年の第1回ロンドン万博が始まった19世紀の時代のエンジンはまさに国家であったと思います。ですから19世紀の万博は、国の力、国の覇権を見せ合う万国博覧会であり、とくにイギリスとフランスが競って産業革命の成果を見せていました。それが20世紀に入ると、時代のエンジンは国家から企業へ転換していきます。大量生産・大量消費という産業力が時代をつくり、まさにいまの私たちの物質的な文明をつくり出してきました。1970年の大阪万博では企業パビリオンが30館以上建つという花が咲きましたし、その前後のシカゴ博やニューヨーク博でも企業館がたくさん設けられたように、企業の力を競い合い見せる博覧会になっていました。では、21世紀の万博を実施するにあたり、これからの時代のエンジンとはなんなのかが問われます。そうすると、やはり該当するものは「市民」であろうと私は仮定しました。21世紀の時代のエンジンである、市民の力、市民相互の問題解決力を見せる万博ができるならば、意味のある万博になるであろうと考えました。

市民の力を引き出す「市民創発プロジェクト」メソッド

実際の市民参加をどのように進めたのかを示したのがfig.03です。

初めは「集まれ！人間力」ということで、開催の2年半ほど前に呼びかけをしました。当初は予算も広報力もありませんでしたので、できる範囲に公募をかけたのですが、愛知県を中心にした方々360人が集まりました。そこで彼らと1年かけてワークショップを展開しました。これは後に、私が「創発型ワークショップ」と呼んでいるものになるのですが、そこから50のプロジェクトが生まれました。このとき、360人の方たちには、NPO・NGOやグループの代表やメンバーではなく、その人個人として参加することを求めました。これはとても重要なことです。

このようにすると当然NGO・NPOから批判が出てきますが、なぜ個人参加かというと、組織の考えが持ち込まれてしまうからです。この頃はまだ万博そのものに対する賛成・反対運動がありましたし、賛成側のなかにもNGO・NPO間のヘゲモニー争いがありました。市民社会というのはセクト化しやすい社会です。簡単に言えば、誰がリーダーなのか、ということになっていくのです。そこで私は、もう一度個から始めようと考えました。前述した時代のエンジンである市民とは、いわゆる近代的な意味での独善的な個ということではなく、そもそも人間性のなかにある、

fig.02
万博は、時代のエンジンを見せる
ショールーム

19世紀	20世紀	21世紀
▼	▼	▼
時代の エンジン は 国家	時代の エンジン は 企業	時代の エンジン は 市民
▼	▼	▼
国の 力を見せる 博覧会	企業の 力を見せる 博覧会	市民の 力を見せる 博覧会

21世紀の博覧会「愛・地球博」は
21世紀の時代のエンジンのちから、
市民・生活者の問題解決力を見せる

fig.03
市民の力を引き出す
「市民創発プロジェクト」メソッド



自発性に根ざした個から出発したほうがよいのではないかと考えて、「個人として集まってください」「決して組織の考え方を持ち込まないでください」という論法で展開をしたのです。そうしたところ、それぞれの人がその場において新たにつながって、例えばある大きなNPOの代表が個人で来たおばちゃんにつながって一つのプロジェクトをつくり出すといったことが起こっていきました。

このように、自分の中の個の部分に対する「気づき」と、他者との「つながり」によって50のプロジェクトが生まれていきました。そこから二次公募をしてさらに参加を募ったところ、分散化して235のプロジェクトに展開していきました。これらは、気づきとつながりによって自発の連鎖のように分散していったのです。そして最終的に3万5000人が参加してこの235のプロジェクトをつくり出す結果になりました。さらにこれを仕上げて万博会場で展開したのですが、瀬戸会場来場者300万人のうち120万人が直接この市民プロジェクトに参加しました。

このときのワークショップでは個から始まる創発型プロセスという考えを採り入れています。それは個から始まり、個と個の相互作用のなかで、オルタナティブな立場や発想をみんなが見出していく手法です。そこで自分にできることはなにかという他者に対する気づきが生まれてきます。当然そこでは新しいつながりも出来、そこから新たなNGO・NPOも生まれました。この過程から愛知県には相当数のNGO・NPOが生まれています。例をあげると、最初は1人の人が農業をしたいと考えたことがきっかけで、9名で食の安全プロジェクトが始まり、いまでは260名ほどのNPOになって続いています。なぜ継続されるかというと、個の気づきから始まっているという力強さがあるからであろうと思います。それは自分で内発的に気づくのではなく、他者との相互作用のなかで生まれていくのです。

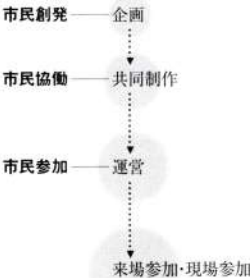
私自身は万博を、多くの活動を生み出すインキュベーション(孵化)の装置だと捉えていました。そのためには、NPOという、すでに活動とミッションをもっている者たちが会合ではなく、個としての出会いが必要です。代々木公園で開かれるアースデイ東京などでもそうですが、NPO・NGOのフォーラムなどには、すでに活動をしている人、身内しか来ないという現象が起きています。どんぐりの会の稲本正さんが「常連ばかりの喫茶店」と言われましたが、結果的にはそういう状況になっています。後でも触れますが、日本における一番大きな問題とは閉鎖的な結合力が強すぎることだと思います。それを開放的なネットワークにしていくためには、もう一度個に還ってから立ち上げることが有効なのではないかと思ったのです。いま進めている「横浜開国Y150」でも、NGO・NPOの方たちから「私たちを無視するのか」という声があるのですが、「いいえ無視していません。ただ、いまあなたたちがいると新しい人が入って来られなくなるのです」と説明しています。愛・地球博でも二次公募の段階でたくさんのNGO・NPOなど組織が入ってきましたが、そこでは個人がベースになって生まれたプロジェクトに組織が連携するかたちを組みましたので、新しい人がたくさん入れたわけです。このようにして、缶バッジを売りながら地雷を除去しようという学生のチームから、盆栽でCO₂を固定化しようというおじさんたちまで、「戦争から盆栽まで」の235の多彩なプロジェクトが生まれました。

fig.04は、市民参加の3つの段階を示したものです。一番下にある「市民参加」は、公共的なイベント事業の運営に市民がボランティアとして参加するかたちで、日本では特に阪神・淡路大震災から盛んになってきたと思います。その上が「市民協働」で、これは行政の事業を市民と一緒にやりましょうというかたちで、私は「この指とまれ参加」と呼んでいます。それに対して一番上の「市民創発」は、市民が時代や地域に対して自分たちはなにができるのかということ、「気づき」と「つながり」のなかでつくっていくかたちです。異文化、異世代の者たちが一つの場に集まることで、相互作用により新しい仕組みが生まれてきます。他者とのつながりや個の気づきをとおして、結果的に新たなつながりが創造されていきます。そこから新しい価値観、新しい仕組

fig.04
市民参加の3段階

新しい市民参加

異分野、異世代の
異なる価値観・個性が集い、
気づき、出会い、学びの
相互作用によって誘発される
新しい仕組みや行動。



みやプロジェクトが生まれ、具体的な行動を誘発していくのです。このような経緯で生まれたプロジェクトは、つながりのなかにすでに巻き込み構造をもっていますので、プロジェクト終了後も多くの人を巻き込んで展開していくことになります。

市民プロジェクトの実際

先述のようにして立ち上がった市民プロジェクトは、今回の万博のなかで、市民パビリオンの3つの会場で展開されました・fig.05。1つめは「対話ギャラリー」で、ここでは「地球の希望」をテーマにさまざまなプロジェクトが対話型の展示を行いました。「地球回廊」というコーナーでは、カンボジアやアフガニスタンの小学校など世界とつながっている10台のノートパソコンの画面が壁面に並んでいて、その前で「地球の授業」が行われました。オープンする10時から10分間はアフガニスタンの小学校とつながるというふうに決めておいて、その時間になると万博会場では画面にアフガニスタンの子どもたちが映り、アフガニスタンの小学校の画面には万博会場の人たちが映る仕組みです。この装置は慶應大学の学生たちがつくってくれました。

毎日そういうことが起こると、アフガン側の子どもたちも興味をもちます。あるときアフガニスタンの小学校の校長先生から「ありがとうございます」とお礼の連絡が入りました。びっくりして「なんでしょう」とお聞きしたところ、「いままでうちの子どもたちは本当に元気がなかった。なぜかというと、9.11以降、自分たちは世界から見捨てられていると思っていた」と言うのです。それが毎日日本の万博会場とつながって、言葉は通じませんが、いろいろなことを話しかけられたり、絵を描いたりしているのを見て、子どもたちが「自分たちもなにかやろう」と言い出し、歌を歌ったり劇をしたり、自分たちの遊びを見せたりするようになりました。そのうち時間も足りなくなって10分が15分になり、それに対して万博会場のおばさん、おじさんたちも絵を描いてまた応えるなど、画面をととして自発的なコミュニケーションが始まっていきました。そして、そのことでアフガニスタンの子どもたちが元気になったというのです。私は、これは新しい市民参加型万博のコンテンツのモデルの一つであろうと思いました。この装置は学生たちがつくったものですから、ひじょうに簡単でシャビーなシステムなのですが、だからこそアフガニスタンとつながる。対照的に、同じ会場に置いてあった国の機関のマシンは、あまりにも高度すぎて現地とはつながらないのです。市民が時代のエンジンであるということのなかには、つながりを回復していくエンジンとしての市民力というものが含まれていると思いました。

2つめは「対話劇場」で、ここに世界中で活躍している人たちを市民が呼んで来て「グローバルダイアログ」を行いました。プロが人を呼んでくるのではなく、「こういう人と会って話しがしてみたい」と思う人たちを呼んできて、ここで、地球に生きる私たちが抱えるさまざまな問題について講演や対話がなされました。万博の会場は、ふつう1つのパビリオンを15分か20分で移動して行くのですが、90分やっても人々がぜんぜん帰らないこともある、ひじょうに滞在時間の長いパビリオンでした。

そして3つめはパビリオン前の海上広場で繰り広げられた「地球市民大交流祭」です。ここでは、泥の家をつくる人がいたり、身障者と一緒に織物を織る人たちがいたり、身体と感性を使って地球や世界のことが学べるさまざまなワークショップ、パフォーマンス、コンサートが行われました。

市民参加事業の成果

今回の万博から得たものは、まず私が「市民の知」のプラットフォームと呼んでいるものです。新しいインターネット上のエンサイクロペディアをつくらうとしていたイギリスの研究者たちが万博

fig.05
市民パビリオン



「対話ギャラリー」の地球回廊では世界の多地点とリアルタイムでコミュニケーションが行われた。



「対話劇場」で行われたグローバルダイアログの風景。



市民パビリオン前の海上広場で開かれた「地球市民大交流祭」。

を見に来日したとき、市民バビリオンを見て「これはまさにcivil wisdom (市民知)だ」言ってくれました。市民知が大事であったと思うのは、先ほども言いましたように、アースデイなどには関係者しか来ませんが、万博のような超大衆空間では、本来そのことにまったく興味のなかった人がたまたま見て出会ってしまうということです。

やはり学生たちが立ち上げたプロジェクトに、幼児買春をテーマにしたものがありました。それを聞いたとき、私は「幼児買春ではセックスがテーマになるので、万博にはそぐわない」と言ったのですが、彼らはどうしてもやりたいと言いました。この企画は、1人の学生がフィリピンに行き、現地のある女性から「あなた方はこの国でなにをしているのか知っていますか」と指摘されたことがきっかけでした。その学生は、日本人がこの地でなにをしているか目を開かれ、このことをきちんと世界に伝え、やめさせたいと考えて、仲間を集めることにしたのです。私が「やめたほうがいい」と言ったところ、学生たちはもう一度フィリピンに取材しに行き、犠牲者たちの言葉をきちんと聴いて来ると、それをミュージカルに仕上げて、たいへん感動的なミュージカルを上演しました。そのことで、万博の目玉であった冷凍マンモスを見に来た人が、たまたま幼児買春というテーマに出会ってしまうわけです。これはひじょうにすばらしい場だと私は思いました。万博で偶然このようなコンテンツに出会うことで人生の新しい方向に踏み出した人もたくさんいます。また、引きこもりだった女の子が会場でいろいろな人の話を聴くうちに外に出るようになってしまったという例もありました。そのような偶然の出会いのためにも、こうしたオープンなショールームが必要なのだと思います。

235のプロジェクトは一見バラバラなことをしているように見えますが、じつはすべてのプロジェクトに、「環境破壊は関係破壊だ」という共通のメッセージがありました。つまり、21世紀に持ち越してしまった社会的・世界的宿題の多くは関係破壊によって生まれている、ということに市民が気づき、「では私たちはなにをするのか?」と問い、私は関係をもう一度回復するプロジェクトを創発しようとしたのです。市民の力とはまさに関係回復をしていく力であって、それは企業や国家にはできないものではないかと私は思います。

「気づき」と「つながり」を生む「市民創発」ワークショップ

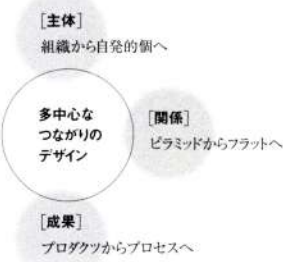
今回の市民参加事業では、当初から3つの重要なコンセプトを立ち上げていました・fig.06。まず、主体を組織ではなく自発的な個にすることです。日本は組織的なものがひじょうに強い国ですので、組織ではなく個に主体をおきたい。20世紀はまさに組織の時代でしたので、そういう意味でも「組織から自発的な個へ」を基本に規定しました。

また、関係性の面では、ピラミッドではなくフラットな関係性を重視しました。日本では、放っておくとすぐにピラミッドが生まれます。ですから、ワークショップをリードしていくなかで、私たちはいつもフラットであることに意識を集中させていました。

もう一つ大事なことは、プロダクツ (成果)よりもプロセス (過程)を重視しました。私たちの社会は、人より早く、人より大きな、人より優れた成果を出せ、という強迫観念のなかであらゆる関係性が壊れ、つながりが破壊されてきたのではないかと思います。その意味で、プロダクツよりも良いプロセスを生み出すことが重要です。つまり、良い旅をすることが大事、ということをワークショップの柱にしました。

では具体的に、どのようなワークショップが展開されたかという点、fig.07のように先ずは「コ (個・私)」から始まります。ここでは、自分史から始まり、自分の身体性や自分自身への気づきを展開していきます。次に「ココ (此处)」にテーマを展開していきます。これは、自分のいる場である地域性・時代性・現場性というリアリティを重要視するという点です。そしてなによりもその場にあ

fig.06
つながりのプラットフォームデザインの
コンセプト



る「あるもの探し」をする。「ないものねだり」ではなく「宝物」を探す。すると「宝として」の他者への気づきが生まれてきます。そして、では自分にはなにができるのかという「ココロ（使命・志）」への気づきを展開していきます。そして最終的には、それを実現させるための「ココロミ（試み・行動）」をプロジェクトメイキングしていきます。このプロセスを何回か繰り返していくと、その内容が質的に高められていきます。

ここでとても重要なのは「自分の中の他者領域」です。それはモラルのような存在ではなく、自分のなかに「他者への^{のりしろ}欄代」があるということです。自分のなかに他者への領域があると気づくことで、共有した部分について「私はなにができるのか」と考えるところからミッションが生まれ、プロジェクトへとメイキングされていくのです。

市民参加の課題

こうした経験を経て見えてきた課題をいくつかお話しします。

私は「気づき」と「つながり」のプラットフォームをつくるのが、これからひじょうに有効なことだと思っているのですが、日本的課題として、「つながり」の光と闇のようなものがあると感じています。その一つは、日本では個人を担保する思想がひじょうに薄いことです。形式としての個人主義はありますが、ほんとうの意味で個人を担保する思想が少ない。もう一つは、閉鎖的なつながりになりやすいことです。これは日本人の心性もあるのですが、同質性を求めてしまい、すぐに親分子分の関係に陥り、セクト化しやすい。それに対して、どこまで開放的なつながりを実現できるかが課題です。そのためには、セクトや境界を越えて水平的につながり、多中心性であることが必要です。「多様性」と言わずに「多中心性」と言いましたが、例えば森は多中心の世界だと思います。命あるものはすべて自分が中心だと思っているでしょうが、その中心が無数にある世界が多中心の世界で、それが水平的につながることで大きな一つのいのちになっていくのだと思います。愛、地球博では、最初の頃私に批判的だったNGO・NPOの人たちが、終わりには「セクトを超えることができた」と言ってくれたことが印象に残っています。

こうした課題の克服のためには、個の気づきを起点とした関係づくりが重要であると思います。私が経験したのは万博というイベントの世界においてですが、万博は、どこまでもリアリズムを追及しますので、顔の見える関係づくりが可能になります。そこで行う創発型ワークショップのプロセスでは、他者へ向かって「のりしろ」をもった開放的な個として、ゆるやかな「自分自身」の境界線への気づきが起き、そこから「内なる公共性」を発見していきます。ヴィトゲンシュタインが、自分という存在は自分の手でボケている、と言っていますが、そこから公共性につながっていく可能性が高いのではないか。そこから始まる市民意識と行動が、閉鎖的なつながりになることを抑制していくのではと思っています。

またもう一点、ポストモダンの思潮のなかで大きな物語が無化していきましたが、万博や爺谷湖サミット（2008年7月7-9日開催）にもみられたように、近年、エコロジーが大きな物語として再浮上してきています。その善し悪しは別にして、そのなかにエコ・ナショナリズムと呼べるような新たな大きな物語の思潮があるように思います。具体的には、西洋のキリスト教に代表される一神教に由来する価値観が、自然を支配し収奪する自然破壊、環境問題の元凶であり、それに対して東洋的な多神教は自然と共存し、善なる21世紀の時代精神なのだという主張で、それが知識人やNGO・NPOで活動する人たちの多くに共有されています。

その主張自体は単なるステレオタイプともいえますが、問題を感じるのは、自然との共生思想をもっている日本こそ、今後の環境配慮社会のリーダーであるという考えがあることで、私自身はそれに大きな疑問を感じています。それは私がキリスト者であるからというわけではなく、現実

fig.07
「気づき」と「つながり」を生む
「市民創発」ワークショップ



の日本が自然と共生してきたかという、そうではないと思うからです。問題の原因は、洋の東西、一神教・多神教にあるのではなく、人間の「内なる原理主義」に原因があって、原理主義であるがゆえに人と自然、人と人のつながりを破壊してきたのではないのでしょうか。私たちは、他者を貪欲に利用したりコントロールしたりして搾取するという命の原理主義を内側にもっているのではないか。これは、旧約聖書・創世記3章にある人間の神への反逆に関わる問題で、私たちの内なる原理主義は、私たちが神になろうとしたときに起動したのではないかと思います。福音がもたらすのはそこからの回復でしょう。福音は、先述した個人の価値を保障すると同時に、キリストによる「気づき」と「つながり」の回復を実現し環境問題も解決に向かわせるものであると考えます。

「気づき」と「つながり」のプラットフォームの創造は、持続可能な発展のための課題解決の重要なスキームであると考えています。環境問題・高齢社会・多文化共生など、さまざまな問題に対して効果的であると同時に、21世紀の地球時代のキリスト教の在り方についても、さまざまな示唆を与えてくれると思っています。

[Discussion]

●——1970年代の全共闘の運動でも、最後は新左翼のヘゲモニー争いになり、連合赤軍の総括のような悲惨な状況に終わってしまった。一度個に戻って始めるという発想は、とても有効と思われるが、小川氏のなかでどのような経緯で生まれたのか。

小川——1997年に先述した早稲田エイジングメッセという国際高齢者年に関わるイベントを手がけたことがきっかけになっている。早稲田には7つの商店街があり、それぞれが主張をもっていてなかなかまとまらない。また、最初は企業やNGO・NPOなどがたくさん集まったが、資金がないと分かるとサーッと人がいなくなった。ところが、そこで最後に残った個人が次の個人を呼んでネットワークを結びながら事業を広げていってくれた。彼らもNPOの代表などが多かったのだが、そこでは組織の視点ではなく個人のつながりで広げていき、ピラミッド状ではないweb(クモの巣)状の組織が生まれていった。これまで私自身プランニングではまずピラミッドを描いてきたが、ここでは蜘蛛の巣のような水平的なつながりによって事業ができるという経験をした。そこから、組織がつながるのではなく個こそつながるというところに還らないと、本来のつながりは生まれないのではないかと考えるようになった。

●——人間の内なる原理主義がつながりの破壊になっているとの指摘に賛成である。それは靖国神社問題などにも特徴的に表れていて、靖国神社に賛成する立場の人たちはもちろん、それとは反対に、国家(公)に取り込まれることを警戒するリベラルやリバータリアニズムの立場に含まれる人たちも最終的にはイデオロギー化してしまっていて、市民レベルで下からボトムアップに解決策を結集することができない状況がある²。

小川——公共空間と呼べるためには、天下りでつくられたのではない本当の市民レベルからの公共装置づくりをする必要があるが、日本ではそうしたものが未だに生まれていないのではない。手前勝手な言い方だが、市民参加型万博はそのためのある種の実験であったと思っている。市民による公共的な追悼装置が出来ることには大きな意味があるが、それをつくるプロセスこそが大切であろう。戦争の記憶の読み直しから始まり、市民参加のプロセスが重要な成果を生んでいくのではないか。ワールド・カフェのように、市民参加のスキームを成立のプロセ

2 | 靖国問題と宗教的原理主義については、本誌Vol.10-No.2(特集「記憶と追悼II」)所収、稲垣久和「戦争の記憶と“日本の伝統”」ほかを、代替施設をめぐる議論については、稲垣久和「靖国神社「解放」論」(光文社)などを参照。

スに入れていくことが重要。また、宗派ではなく個の参加からつくり出していくのがよいのではないかな。

●——参加した市民のなかに、例えば北方領土返還といった政治的な主張をもつ人たちがいる場合、排除はしないのか。

小川——排除しない。ただ、1年間のワークショップで個に戻ることを通して、そうした強力な言葉は消えていく。それは同族だけではない多様な人との情報交換を通して公共的な意識に転化されていくからではないか。そして自己主張よりは、気づいた課題をどのように解決するかという方向に転換していく。「何をしたい」から「何ができるか」に発想が変質していく。NPOは最初にミッションありきなので、例えば、針葉樹林を植えるのがよいと主張するNPOと、広葉樹林を植えるのがよいと主張しているNPOでは、どちらが正しいかという正義論を戦わせる場になってしまう。それを、「緑を守ろう」という個人から始めることで、私に「何ができるか」という発想になる。

●——ワークショップを指導するコアメンバーは複数いるのか。

小川——万博の最初の頃は私だけだったが、そこで手法を身につけた人がいて、いまはファシリテーターが各地にいる。手法開発も少しずつ進歩していて、ファシリテーターがいなくてもできるやり方もある。

●——「気づき」や「つながり」を生み出すワークショップは、万博のようなハレの場ではない日常的な空間でも行われているのか。

小川——日常的な場で行うことが一番大事なことだと思っている。万博のような場で経験した人たちが地域に入って広げていくのがよいと思うし、実際に各地で行われている。こうしたワークショップは、誰にでも出来る。

●——一般的には、声の大きなプロジェクトが進行して、よいアイデアが埋没してしまうことが多いが、市民のアイデアがかたちになって成果が社会に還元されていくまで、どのような段階を経て導いていくのか。

小川——なんらかの公共的なミッションを掲げることが重要だろう。万博では世界の問題解決を考える場という規定があった。また「横浜開国Y150」では、近代国家になって150年だということ一度考えようという主旨で、「開港」ではなくあえて「開国」とした。そのような軸を立てることなしに人は集まって来ない。靖国神社問題も一つの軸が立つと思われる。その際に、皆が一つの軸に囲まれるのではなく、それを広げたオープンな世界にすることが大事になる。「個人」から始め「フラット」を繰り返し強調し「プロセス」を重視して、プラットフォームをデザインしていくことが必要。気を抜くとすぐにパワーがどこかに偏ってくる。

けれども、ある段階まで行くと自発の連鎖が生まれ、皆がひじょうに協調的になる。自分がリスクを負う立場になってくると他者との関係を重要視するようになる。当初、地球市民村に集まった団体も仲がよくなかったが、あるマネジメントの問題が起きたときに、それぞれのマネジメントスキルを出し合ってきて協働し始めた。ミッションのレベルではぶつかっていたグループがマネジメントのレベルでは協働でき、その経験から対話が始まった。

●——ヘゲモニー集団のようなものを一度壊して、あるテーマで皆が新しくつながっていくために、私たちには個人に戻るトレーニングを積む必要があるということだろう。

小川——ワークショップが終わるごとに感想を書いてもらったが、会社・NGO・NPO・財団などに所属する人たちでも、9割の人が「これだけ多様な人と話しをするのは初めてだ」という感想を書かれていたのがとても興味深かった。私のしているイベントは学校のようなもので、その実験をしていると思っている。いま関わっている横浜はリアルな土地や社会であるので、その実験結果がどう活きるかが問われるだろう。

●——「気づき」や「つながり」という視点で、キリスト教会についてどのように考えるか。

小川——教会を大きくする教会成長論は、つながりを壊していった20世紀のスキームそのものであり、内なる原理主義を起動しているのではないかと感じる。大量生産・大量消費・大量廃棄には人間の欲望をからめ取る魔力があり、気づきを起こさせない。「気づき」ということは本来、福音の働きの基本であろう。他者、特に一番重要な他者は神であるという意味で、「つながり」はスピリチュアリティの問題であり、教会の役割で重要なのは、気づきをもう一度起こさせることではないか。「神を信じなさい」と説くことや、礼拝に來た人が感情的な満たしを得ることだけでなく、本当に「自分本来の個に目を留めておられる方(=神)」がいることに気づき、そこからつながりが始まることを体験していく機会を教会が提供していくのが一番大事ではないか。それが回り道のようにも一番良い宣教ではないかと思う。

●——キリスト教は自分たちのアイデンティティをもって市民社会に寄与していく必要があり、それをしないと社会のなかで市民権を得ることはむずかしい。現状では、靖国神社反対運動にみられるように、国家に反対という対国家しか念頭にないが、ほんとうは市民社会そのものを相手にしなければならない。キリスト教の価値観を全力投球して他者と協力できる公共哲学を展開させる必要があるが、そうした発想は神学の世界にもほとんどみられない。その意味で、小川氏の実践には、キリスト教が脱皮していく可能性が含まれていると感じる。

住民流・助け合い起こし

これからの地域福祉のあり方

木原孝久

公助から共助へ

厚生労働省が2007年に立ち上げた「これからの地域福祉のあり方に関する研究会」¹に参加するよう依頼されましたが、その研究会の目的は「すき間を埋める方法を考えてほしい」というものでした。国はこれまでさまざまな制度を整備してきたのですが、孤独死、徘徊、虐待のほか、介護サービスの枠外（ゴミ出し、送迎……etc.）、軽度者、一時的要介護者、サービスを切られた人、などの支援のように、どうしても拾いきれない制度やサービスの谷間が生まれてしまう。その部分をどうやって埋めるかを研究してくれということでした。これはいままでも初めてのことだったと思います。

fig.01に、自助－共助－公助の関係を図示しました。ふつう福祉というと、行政の福祉制度などの「公助」のことで、それが福祉のすべてであるようなイメージをもたれています。それに対して、当事者の側で行うのが「自助（セルフヘルプ）」、その中間にあるのが「共助」です。そしていままでも、このセルフヘルプの部分はほとんど行われていないという前提で福祉の議論が行われてきていました。それが間違いであることをこれからお話しますが、行政は「福祉はわれわれがやります」と言い、住民も行政に「あれをしてくれ」「こっちもしてくれ」と言って公助が肥大しているのがいまの福祉です。

また、介護保険が始まって起こったのは、ケアマネジャーが入ってある人が要介護の認定をされてデイケアに行ったり施設に入所したりすると、住民は、公的サービスが入ったからといって手を引いてしまうということでした。これは日本人の特性です。また、福祉関係者も素人は手を出すとなってしまう。行政はいままで共助と公助の車の両輪で福祉を充実させるといつて来たのですが、公助が来ると共助は萎縮してしまう。研究者にはこのことが分からなかったのですが、現場の人はこれに気づいています。その結果、要介護5と認定されれば、本人が自宅で暮らすことを望んでいても、ケアマネジャーなどが説得してほとんど自動的に特別養護老人ホームに入れてしまうというように、担い手主導の福祉、当事者のやりやすい方法や希望とはズレた福祉になっているのです。ですから、公助と共助できれいに役割分担をしましょうというのではなく、公助を共助に渡していく、できるだけ自助、共助の部分を大きくしていく必要があるのです。

地域が見えない！

隙間というものは、ふつうの制度では拾い切れません。あそこで虐待が起こっている、あの家で孤独死が起こりそうだ、といったことは見えません。そのため孤独死が毎年3万人を越えたままなのです。

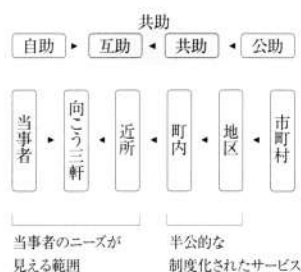
福祉の一つの地区単位は学校の学区と重なっていて、その範囲に福祉拠点として社会福祉協議会や地域支援センターがおかれています。しかし都会ではとくにそうですが、どこに困っている人がいるか、どこにボランティアをしたい人がいるかといったことが福祉関係者には分かりません。そこで結局、推進者側の都合で福祉が行われることになります。「地域包括支援センターを設置しました、困った人は来てください」「ボランティアをしたい人はボランティアセンターに来

木原氏の提唱する「住民流福祉」についての詳細は、住民流福祉総合研究所のWebサイトおよび木原氏の著書『住民流助け合い起こし——「頼れる地域福祉」への8つのハードル 上・中・下』（住民流福祉総合研究所、2009年）ほかを参照。

▶ <http://www5a.biglobe.ne.jp/~wakaru/index.htm>

1 | 報告書が「地域における「新たな支え合い」を求めて——住民と行政の協働による新しい福祉」（2008年3月）としてまとめられている。

fig.01



てください」となります。ところが、実際の地域というのはfig.01の下図のように、当事者がいて、その周りに向こう三軒両隣、ご近所(50軒)、町内(500軒)、地区(5000軒)、市町村(5万軒)というように、「圏域」というバウムクーヘンのような層になっています。当事者は1kmも2kmも離れている地域包括支援センターまで行きませんし、民生委員や社協などの福祉資源は町内や地区にいて当事者のニーズが見えません。いまの地域福祉は、当事者が来ることも推進者が見に行くこともできない、無茶な福祉をしているのです。

そこで私は、それぞれの圏域にどのような福祉資源をおいているか点検して、50世帯のご近所ごとに福祉推進委員のような人をおいてはと提案しています。東京にいと分らないのですが、不思議なもので全国どこに行っても50世帯ほど、30から80世帯で集落が出来ています。なぜ50世帯かというと、これがそれぞれの家のニーズの見える限界だからです。50世帯の次に500世帯の町内に民生委員を、そして5000世帯の学区に地区社協をおく。そこに当事者からのニーズが上がってくればよいのです。しかし後でお話するように、ニーズが上にあがるのはひじょうにむずかしいことです。

自助——「助けて」と言えることが始まり

先述の厚労省の研究会でもそうでしたが、いまは、福祉は自助から始まるということがまったく考えられていません。私の言う「自助」は、当事者が自分の安全や命を守るために自分なりに努力をするということ、別の言葉で言えば、助けてもらう努力をするということです。一つの例を紹介すると、高齢の妻が夫の介護をしている老老介護のご夫婦がいます。奥さんも要介護なので、2人とも介護保険サービスを受けていますが、問題は、ゴミ出しや外出の送迎といった、介護保険がカバーしない枠外のことです。おばあちゃんはそれを自分でなんとかしなければなりません。どうするかというと、「すいません。あなたは雪掻きをお願い」「あなたは生協に私を入れて」「あなたはゴミ出しをお願い」「あなたは車で私を運んで」「あなたは私をバス停まで送って」と、細かくご近所のサービスを自分で調達しているのです。こういうのを自助努力、自助といいます。どうしてこれができたかというと、この人は昔お茶の先生をしていたときのお弟子さんがたくさんいて、いままでの恩を回収しているのです。

また、家族が「助けられ上手」の場合があります。痴呆症になってしまったお母さんを介護していた埼玉県春日部市のTさんは、自分が倒れそうなので、クリーニング店に「ボランティア募集」という貼紙をさせてもらいました。そこで「母と一緒に徘徊ボランティア」だとか、「母と花札をして時々負けてくれるボランティア」だとかを募集し、その人たちを上手に活用したのです。公的サービスではなく共助を利用しているわけで、こういう助けられ上手さんがいます。

私は全国で、支援の必要な人にご近所の誰が関わっているかを調べる「支え合いマップ」づくりを進めています。日本はまだほとんど家族福祉ですから、一人暮らしの老人のところにはたいてい家族の誰かが来ています。問題は毎日来ているわけではないことです。たまに来る間に孤独死が生まれるのです。ある方は、独り暮らしをしているお母さんのところに来るたびにご近所を5、6軒回って、「母のことをお願いします」と頼んでいきます。すると言われたほうも「あなたがそう言ってくれると、私はおばあちゃんの家に入れるわ」となるのです。ふつうは黙って来て帰るので、ご近所も気にしているけれどもその家に関われない。それが、一言頼むことでご近所の互助が動きだすのです。

では、「助けてくれ」と言ったとき、どれくらいの人が助けてくれるのでしょうか。ある要介護のご夫婦は、買い物に行って車椅子の介助を頼むと、10人中9人は必ず手伝ってくれると言います。長野県須坂市に調査をしてもらい、「あなたは困った人がいたらどうしますか」と質問したところ、

頼まれなくても助けるという人が2割いました。これは世話焼きさんタイプです。また、頼まれたら助けるという人は7割いて、合計すると9割の人は助けると答えているのです。このことは私にとって大きな発見でした。では、10中9人が助けてくれるというのに、どうして助け合いが広がらないのでしょうか。私たちは、何十年も「助け合いましょう」と言ってきたはずですが。

講演会などで「困ったときに『あなたこれやって』と、わりに平気で頼める方は手をあげて」と言うところほとんど手があがりません。調査したところ、100人のうち3-5人しか助けてくれと言えないことが分かりました。ですから助け合いが始まらなかったのです。福祉のむずかしさは、人を助けることではなく、助けを求めることにあります。クリスチャンの方は、愛とか優しさが必要だと言われますが、そうではなく、共助の始まるカギは上手に助けてくれと言える人がどれだけ増えるかにかかっているのです。福祉の世界は自分が担い手になったことしか想定していません。本当の優しさをもった人は、まず自分が人に助けてくれという見本を見せていただきたいと思います。

孤独死は、50、60歳代の男性に多いのですが、それは行き詰ったときに「助けてくれ」と言えないからです。介護苦で無理心中するも男です。でも女は言えるのです。それを言えるのが私のいう自助ということです、それがないと共助は始まりません。

先ほどお話しした元お茶の先生の例だけでなく、自助にはいろいろなやり方があります。例えば、fig.02は福井市内の古い県営住宅です。黒が一人暮らし、白が空き部屋ですが、全体が高齢者ばかりでほとんど老人ホームのようになっています。こういう状態になったとき福祉関係者は、「こんなに要援護者がいるから、多くのボランティアを養成しなくては」と考えます。これは自助という発想がないからです。ところが、この住宅のおばあちゃんたちに聞いてみると、「私は前の19号棟の人と、電気がついたら相手が元気だと確認し合ってるんだよ」「朝カーテンが開いたら元気だって分かるのよ」と言うのです。つまり要援護者同士が助け合う、自助をしているのです。グレーの丸印はたまり場になっている家です。そこが安否確認スポットになっていて、「今日は誰が来ないね」というと、リーダー級の人が電話訪問、自転車訪問をする。これで完璧です。

また、いろいろな当事者たちの間でこうした自助グループもできています。「自死遺族の会」「ユニークフェイスの会」(これは顔にあざがある人たちの会です)「伴侶動物との別れを癒す会」「夫在宅ストレス症候群の妻の会」「片付けられない女の会」「生きづらさを抱える女の会」「子供を虐待するママの会」「妻に暴力を振るう夫の会」……もうなんでもありです。人びとはこのようにして同じ問題を抱えた同士が連帯し、助け合って、そのノウハウを他の人にお裾分けしています。「子連れママの会」では、同じ地域のママが助け合って、外出情報の教え合いから始まり、子どもの預け合いをし、子連れコンサートまでやってみました。

もう一つ例を挙げます。fig.03の真中のおじいちゃんは、認知症で寝たきりの要介護5でした。

fig.02

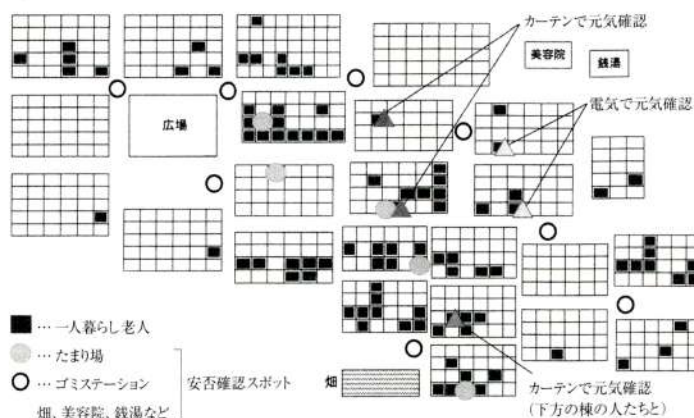




fig.03

周りにいるのは埼玉大学看護科の学生で、後ろ真中の方が、大塚さんという准教授です。なにをしているかというと、このおじいちゃんは学生たちに学習モデルボランティアをしているのです。地域は双方向になっています。人間には心の貸借対照表というものがあって、人のためになにかをすると資本が増えますが、人に助けてもらって負債が増えます。負債が増えるとその人のプライドが傷つけられます。ふつう要介護度が高い人は、朝から晩まで負債が増えてその人のプライドはボロボロに傷ついています。必要なはその人の資本を増やすこと、つまり担い手になるチャンスをあげることです。これが地域の共助のルールです。「あなたは要介護だから寝ていたらいいんだよ」というのはとんでもない話です。そして、ボランティアをしたおじいちゃんには、治療効果も出るのです。これをボランティア・セラピーといいます²。

静岡県浜松市(合併前は天竜市)に天竜厚生会という大きな社会福祉法人がありますが、そこではたくさんのボランティアを受け入れています。その受け入れ担当者の方がこんなことをしています。ある時、学校の先生が子どもたちをボランティアで派遣したいといってきました。「いいですよ。午後待っています」。50人の子どもたちが来る前に、彼女は部屋に行って、おばあちゃんたちに「これから子どもがボランティアに来るから頼むね」と言う、「任しとき」となります。ボランティアに来た子どもたちが学校に帰ると、「何月何日ボクらはボランティアをしました。たいしたことしていないのに、おばあちゃんは泣いて喜んでくれて、ボクは感動しました。またボランティアをしたくなりました」と言います。じつはおばあちゃんたちのほうが子どもたちのためにボランティアをしているのです。

アメリカでは、タイムダラーという制度があり、自分がなにか人のためにしたサービスを1時間1点で貯蓄しておいて、老後に自分でおろすという制度があります。あるアメリカのおばあちゃんが、「皆さんにいつもやってもらっているから、今日は私がやってあげる」と言うので、なにをするかと思うと、「今日一日あなたのために祈ってあげる」というのです。祈ると1ドル。そういうのをアメリカの人たちは認めるのですね。

このように、共助で大事なものは互助の部分です。当事者が自分で必要な助けを調達する助けられ上手がセルフケアマネジメント、当事者同士が助け合うのがセルフケアグループ、当事者自身が担い手になるのがヘルパーセラピー、このように当事者力を強化すると、制度に頼る部分はグッと少なくなります。

共助は「ご近所」から

fig.01の地域社会のなかで、研究者が共助の部分だとしている町内や地区のレベルでは、サービスがシステム化してしまいます。そういうところは、例えば高齢者を100人くらい集めて食事サービスをするといったように、限りなく公的サービスに近い一律のサービスになっています。それに対して重要なのは、ご近所、向こう三軒両隣の互助の部分です。なぜ重要かというと、地域には制度では拾い切れない隙間があり、そうした当事者の周りにあるニーズが見えるのはご近所までだからです。私は何十年も関わってきて体験的に分かりますが、町内に行くと当事者のニーズはまったく見えません。見えないからなにをするかというと、ふれあいサロンなどのイベントをするのですが、実際の困った人たちを助けることは忘れてしまっています。ですから本当に困った人を助けたいのならばご近所のところまで来なさい、と私は言っています。「あのうちは虐待をしているようだ」「あのおじいちゃんは孤独死しそうで危ないな」といったことを、ご近所の人たちは知っています。ただし見えているのはたいてい女です。男はあまり見えません。女性はいつも怖いくらい見えています。ですから町内や学区に拠点を置くのはナンセンスなのです。

2 | 木原孝久『ボランティア・セラピー——
要介護者の力が活きる福祉のカケチ』中
央法規出版、2005年

阪神淡路大震災で家の下敷きになって助けられた人たちがいましたが、レスキュー隊が助けたのは15%だけで、ほとんどの85%は向こう3軒の親しい方がパッと来て助けているのです。神戸の人はみんなそのことを知っています。

そこで私は、ご近所マップを使って「災害時要援護者支援制度」の実践を各地で始めています。マップづくりで、重度障害者の方がいるとまず「この人の近くの親しい人は」と聞きます。そのなかで、「いざという時に来てもらいたい人は誰がいい?」「ゴミ出ししてもらっているあのひと、パソコンクラブのあの人がいい」「じゃあ頼んであげるね」といったかんじで登録してもらいます。でも、災害のときはその人たちが来られるとは限りませんから、そのためにfig.04のように「向こう3軒の安心ネットづくり」もしておきます。いざという時に、まずその人たちが駆けつけるのです。避難はその後からです。

防犯の場合もそうです。ドロボーが入るのをあきらめる理由の8割がご近所の目によってだといえます。ご近所でお互いが様子を見ている、知っているような地域にはドロボーさんも入りにくいのです。これが離れた場所にある駅前交番や町内会のパトロールでは防犯はできません。カギになるのはご近所で、ご近所圏で防犯・防災・福祉の点を、線、面にしていくことが重要になります。この場合の面というのは、緊密な助け合いのことです。

ニーズは上に上がるのがとても難しいという特性を持っていて、拾いに行かなくては分かりません。私はニーズの生態学というのを調べていますが、ご近所には、井戸端会議をするような場所があります。そこで人々は集まって愚痴を言ったりして、当事者は誰かに悩みを話しています。そのニーズ発信場所や愚痴を言う相手を突き止められればよいのです。そこに行けばニーズが見えます。

これも「マップ」をつくることによって初めて見えてきます。まず近所のおばちゃん4、5人に集まってもらいます。男はあまり近所が見えませんが、できれば女性です。いま江東区の団地でマップをつくっていますが、「この人にあの人が関わっている」「このおばあちゃんはあの人に悩みを言っている」「この人はこの人のところにいつも立ち寄っている」というふうに、近所に驚くべき関係があることが分かります。ニーズ発信場所に行くということは、別の言葉でいうと当事者の側からものを考えるということです。

ご近所には「世話焼き」さんがいる

fig.05は東京の西東京市でつくったマップです。ご近所で一番顔の広い「大型世話焼き」のおばあちゃんが●印の人で、この人が見えているのは大体50世帯です。このおばあちゃんが亡くなったらどうするんだと聞くと、「いや、大丈夫。親から世話焼きの性格を受け継いだ4人(図の□印)を見つけたから、いま英才教育をしている」というのです。世話焼きという資質は天性のも

fig.04

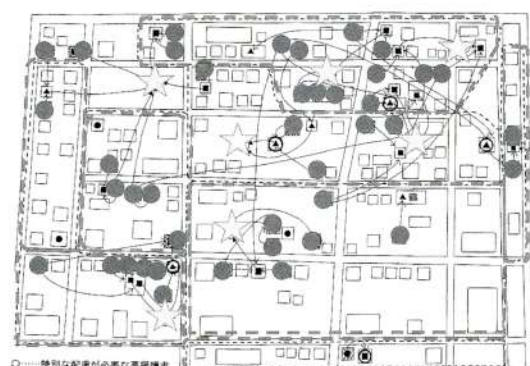


fig.05



のです。元々もっていたものを磨くことはできますが、訓練で身に付くものでも、ましてやなにかの資格を取ったり大学で福祉を勉強することで身に付くものではありません。このことを認めることは重要です。地域には、1…気になる人が見える、2…すぐ関わる、3…相手から見込まれる、4…人間大好き、だから人脈あり、5…助けられ上手でもある、そういった天性の世話焼き気質をもった人がいて動いているのです。

さらに「超大型世話焼き」というのがいて、数百世帯の面倒を見ている・fig.06。それだけのニーズが見えるのかと聞くと、やはりその人でも見えるのは50世帯だそうです。ではどうしているかというと、各ご近所ごとにニーズの見える人がいて、その人が彼女のところにもって来る。自分が行けないときは、そこの世話焼きさんに頼むというのです。そして地域によっては「超超大型世話焼き」というのがいるのですが、この人は数千世帯を把握しています。川崎市宮前区の野川地区には2万8000人を仕切っている鈴木恵子さんという超超大型世話焼きの女性がいますが、その人が中心になって「すずの会」というネットワークができていて、50くらい世話焼きさんがそれぞれの地区を仕切っています。この人たちは皆、なんの肩書きもないふつうのおばちゃんたちで、みんな好きでやっているのです。

よく50世帯というのは地域によって違うのではないかと質問されますが、これはどんな大都市でも農村でも関係なくどこでも同じです。人間が人々の状況を見ることができる範囲が50なのです。そのなかには、2、3人の世話をする人、5、6人の世話をする人、十数名の世話をする人がいて、こうした大型と小型が連携しています。

ご近所活動には、1…ニーズが見えやすいし少ない、2…世話焼きなら解決できる、3…問題がまだ小さな芽のうちにつぶせる、4…それだけ個々の負担が少ない、というメリットがあります。地域の福祉関係者までニーズが上がって来るのは大変ですし、そうとうに紆余曲折があつて上がって来るので、かなり深刻になって手に負えなくなっていることが多いのです。しかしご近所ならニーズが見えていますし、世話焼きが解決でき、問題が小さな芽のうちにつぶせます。公助では十把一絡げのサービスになってしまうので、なるべく公助では引き取らないで、近所で解決するのが利口なやり方です。

ご近所の後方支援

では、ご近所はご近所でやらせておけば大丈夫かというと、そうではありません。大型世話焼きでも対応できないことがあるのです。その場合どうしているかというと、多くの場合、世話焼きさんが胸の中にしまい上にはもって行かないでいるのです。そのようななかで、あるところでは、ご近所に住んでいる民生委員が毎日世話焼きさんのところにやって来て、できないニーズを拾って公助につなげています。つまり福祉関係者のほうが世話焼きに近づいて行って拾っている

fig.06



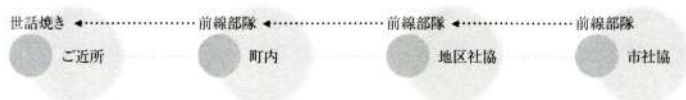
fig.08



のです。しかし多くの場合、福祉関係者がご近所の世話焼きを認めるかという、認めていない。これが問題です。このように人との関係をつくるのは、センスがないとできません。町内会や隣組の班長さんなどは輪番制で選んでいますから、こういうセンスがある人になるわけではありまないので、最初から公助につなげるパイプが詰まっている場合もあるのです。

日本の福祉は衰えていると感じますが、それは困っている人を実際に助けるという原点が欠けているからです。福祉は困っている人を助けてなんぼの世界です。困っている人がいたらみんながそれを解決しに行くはずなのに、そこには行かないで、組織をつくる、仕組みをつくる、会を開くといったことをし、それで福祉をやった気になっています。福祉が機能しているところでは、町内会の福祉委員のなかに女性の民生委員や老人クラブのおばあちゃんなどがいて、そういう人がご近所の世話焼きネットのところまで来て、そこでできないニーズを福祉委員会や公的福祉のところにもって来て対応しているのです。このように、ニーズがうまく伝わるためには、市町村、地区社協、町内などの各圏域のなかに、下までニーズを拾いに行く前線部隊の女性たちがいることが必要になります・fig.07。

fig.07



住民の流儀に従え

福祉には「住民流(当事者主導)」と「関係者流(担い手主導)」があります。関係者流というのは福祉関係者がつくる福祉で、簡単にいうと担い手側の都合で福祉をつくります。ですから、相手を分別収集し、こういうサービスがあるからこっちに來いといいます。そのほうがやりやすいからです。それに対して住民流は当事者のほうから見ます。各地でこの話をするとう住民の方はすぐに分かってくれます。福祉関係者は分かったような顔をしています、体質は依然として関係者流で、なかなか私の言っていることが行動に移せません。当事者の側から福祉をつくるということに慣れていないのです。

社会福祉協議会が一人暮らしの方を支援する場合、よくあるのはボランティアを養成して見守り隊をつくり、「おばあちゃん、見守り隊から来ました」とやることです。これは格好いいのですが、担い手の都合の福祉です。このおじいちゃん、おばあちゃんは、近所に誰か「私はこの人に見守られたい」と見込んでいる人がいるはず。支え合いマップをつくってみるとちゃんといます。これをよしとすればいいのです。つまり当事者がよいという人がいい。

最近奥さんに亡くなられて完全に引きこもってしまい、誰が行っても戸を開けてくれないおじいさんがいました。世話焼きさんに聞いても、「木原さん、この人はだめだよ」と言います。そこでマップをつくりました。マップづくりでは、各家に名前が入っていて、それを指さしながら「この人はどうだろう」「だめ」「この人は」と聞いていきます。すると「私、この人がこの間おじいちゃんの家にいるのを見たよ」と出てきます。すると別の人が「私も見た」と思い出していくのです。不思議です。参加した人たちも「私、こんなに知ってるとは思わなかった」とびっくりします。いままで15年ほどマップづくりをしています、どこでも、まったく孤立している人というのは一人もいませんでした。この方の場合には2人いました。趣味友達、犬の散歩友達というのがあります。このようにして、本人が誰を見込んでいるかをていねいに探してあげること、これが住民流です。

先ほどもお話しましたが、助けられるだけでは住民流、当事者主導にはなりません。要介護の

おばあちゃんがいた場合、ふつうこの人はいろいろなサービスを受けています。これは担い手側からみるとどうということはありませんが、受け手からみると朝から晩まで「すみません」「すみません」と言って心の貸借対照表が負債ばかりになっています。ですから、おばあちゃんにできることを探してあげる。あるおばあちゃんは、いつも授産施設でパンを持って来てもらっていましたが、私だけのためだけでは申し訳ないということで、自分の家に客を集めました。

さらに重要なことは、当事者をもっと豊かに生きられることです。fig.08 [p.25参照]の■印は在宅の認知症のおばあちゃんです。近所の主婦たちに「おばあちゃん、いつもなにをしているの」と聞くと、地図のようなことが分かりました。時々ショートステイに連れて行かれ、週1回ミニデいに、ほかにもあちこち行っている。一番左は昔の同窓生。その右の丸印の家でしている趣味の集まりに入りたいけど「認知症で心配なので来ないで」と言われて入れてもらえない。その右の丸印のところでは週3回ゲートボールをしていて、ここは仲間に入れてくれる。下の丸印の家では井戸端会議のサロンを開いていて、ここも入れてくれる。これでなにが分かるかというと、地域では要介護者も人間らしく豊かに生きたいと思っているということです。

いまの福祉は安心安全福祉に偏り過ぎています。ところが本人は、豊かに生きたいと思っているのです。今日は趣味をやりたい、今日はゲートボールをしたい、今日はふれあいサロンに行きたい。これを認めるのが福祉です。ところがケアマネジャーが関わると、「おばあちゃん、あちこち歩くと危ないから施設に入りましょうね」となってしまいます。いまの福祉は退化してしまったようで、なにかおかしい。本人は、怪我なんかしてもしょうがない、大事なことは豊かに生きることだと思っているのです。

住民流 ボランティアで

群馬県で認知症のHおばあちゃんが歩くルートを調べました。マップをつくると、ちゃんと毎日寄っているところがあって、とくにK子さんが店主をする履物店では毎日、半日ほど過ごしていました。おばあちゃんはここがよいと選んでいて、ここに集まっているみんなもおばあちゃんを受け入れています。K子さんは毎日半日おばあちゃんを受け入れて、お弁当もつくっていました。どうしてそれができるかというと、K子さんは本業中にやっているからです。ボランティアというのは仕事以外の余暇ですと思われるのですが、この場合本業のなかでしているのです。

知的障碍の朋子ちゃんは、毎日専門学校に通っていますが、よく迷子になります。そこでお母さんが「民生委員さんすみません。この子に張り付いてください」と言っても、それは時間的に無理です。民生委員がどうしたかというと、朋子ちゃんが通学する時間に、いつもそこにいる人たちにお願いしたのです。朝自宅を出て通りかかるお店の人に声をかけてもらう、同じ車両に乗る人に付き添いを頼む、駅を降りたら駅にたむろしている学生に付き添いを頼む。そういうふうにしてその瞬間だけ手伝ってくれる人をお願いしたわけです。頼まれたほうも自分の生活の接点でするので可能です。これが住民流です。ボランティアセンターに行って、グループをつくって、研修を受けて、ということではありません。

お祭りのような非日常をハレといい、ふだんの生活をケ(日常)と呼びますが、一般のボランティアなどが「ハレボラ」なら、住民流ボラは「ケボラ」です。そしてケボラならば、私たちが誰でもできます。いまハレボラが減ってケボラが増えているのです。

[Discussion]

●——公的な福祉の役割をどのように考えるか。

木原——サービスというものには怖さがある。大型スーパー出店の影響で近くのお店が閉店して高齢者の買い物が不自由になったのでタクシー券を支給するといった場合、最初は5枚だったものが翌年は10枚、次は15枚ほしいとなっていく。そうではなく、例えば、おばあちゃんがいつもお裾分けをしていた人に頼んで1回送ってもらったら100円だけ出すというように、より助け合いをバックアップするようなお金の使い方をしていくのがよい。助け合いなら相手が見えるので、サービスと違って要求だけが増大することはないだろう。

お金の使い方という点でも、社協で職員を1人雇うよりも10人の超大型世話焼きを雇ったほうがよい。助け合いが機能するためには、500世帯の町内会にあたる10くらいのご近所を回ってそれぞれの場所で助け合いを仕掛けていく超大型と、その人たちを地区ごとに束ねる超超大型が必要。超超大型になると1地区・3000世帯で500世帯の町内会6つほどを束ねることになるので、それをただでやれというのは無理だが、そうした女性たちは月3万円でも喜んでやると言っている。1地区が3000世帯とすると10地区3万世帯(10万人)が大体1つの市になるので、地区ごとに1人の超大型世話焼きを頼むと、1人3万円×10地区・10人で年間360万円で済んでしまう。それに500世帯・10のご近所を超大型が仕切るが、これは無償でしてもらう。

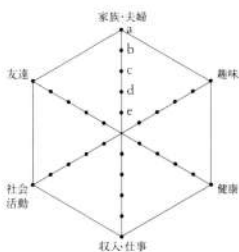
平均的に50世帯のうちデイサービスを利用しているのは3、4人で、これくらいは地域の互助でカバーできてしまう。このやり方だと施設もあまり必要ではなくなるが、公助でやると、施設を造るなど膨大な予算が必要になる。また公助では年間数百万円も使って広報誌を作成しているが、このネットワークでは大型世話焼き―世話焼きといった口コミですべて伝わってしまうので、広報誌などに予算を使う必要はない。

●——介護保険制度やケアマネジャーなどの役割はどのようなものになるのか。

木原——当事者には、1…介護サービス(ケアプラン)、2…サービスの枠外の対応(ゴミ出し、庭木の剪定…など)、3…介護予防、4…住み慣れた家や地域で、5…その人らしく豊かに生きたい、という5つの課題がある。いまケアマネジャーが関わっているのは1だけで、良心的な人が2に関する必要を感じて悩んでいるという状況だろう。しかし2-5はほとんどが地域住民と協力しないとできない課題である。先ほど触れたように要介護者であっても豊かに生きたいと思い、地域のサークルにも入りたいと思っているが、ケアマネジャーが関わると地域が手を引いてしまう。実際にはケアプランよりも先にライフプランをつくることが必要で、これは住民有志が当事者を囲んでつくらなければならない。人間が豊かになるためにはfig.09のように6つの条件が必要。そのための本人の努力を住民がどうバックアップできるかが課題になる。

80歳の夫ががんになり、74歳の妻が要介護4というご夫婦がいた。ケアマネジャーは、多くの場合そうするように、夫婦共に倒れてしまわないように、奥さんを施設に入所させるようご主人を説得したが、ご主人は奥さんと一緒にいたいと応じない。そこで先述の鈴木恵子さんに相談したところ、鈴木さんはその奥さんをホストに、奥さんの自宅を開放してサロンを開いた。奥さんには主催者になるので手当ても少し差し上げて、まず自分がボランティアになることから始めたわけだ。その結果、いろいろな友達に来るので心が豊かになり、その友達と一緒に手芸などを楽しむ、夫も参加することになり、彼女が元気になって医者も奇跡だと言った。これが施設に入ってしまうとどちらも弱っていくだけである。周囲は、週一回デイサービスに行くことや、病院に通院する移送サービスなどをバックアップしている。このとき面白いのは、鈴木さんの家の前にT子さんという少し鬱になっている80歳の女性が住んでいて相談を受けていたが、T子さんに、サロンを開くので先ほどの奥さんをよろしく、とボランティアを依頼し、同時に奥さん

fig.09



a…完全に充足
b…かなり充足
c…どちらともいえない
d…あまり充足していない
e…充足していない

にもT子さんをよろしくと依頼していることである。

これは当事者を中心にしてまずライフプランから入り、残りの部分を、デイサービスを入れるなどしてカバーしている例である。

●—— そうした場合、日本人はなかなか自分の家を外に開こうとしない。

木原—— 開かないということは、別の言い方をすると助けてもらうことに抵抗があるということ。先日、団塊世代の地域デビュー講座に講師として行って、「皆さんボランティアをしたいと思っているだろうが、それはまだ早い。その前にあなたたちは助けてと言うことのほうが先だ」と話したところ、「60年生きてきて、人に助けてくれと言っていいと初めて教わった」と感動していた。小学校で福祉を教えるときボランティアから教えているのではだめで、いじめられた時に助けを求めることから教えるべき。そのことをなにも教えていないことが問題。まず助けてもらうよう自分を開くことが必要。

江東区で民生委員をしている女性が、自分の夫が痴呆になっていることを地域に言ったところ、地域の何人かが「よく言ってくれた。実はうちの夫もほけている」といい始めた。

●—— 台湾ではインドネシアやフィリピンなどからの介護労働者を多数受け入れていて、家庭をオープンにする雰囲気があるが、日本では、他人を家に入れないことや、言葉の問題などが壁になってむずかしいといわれる。

木原—— 自宅を開放して、いつでもどうぞという人を「全開きの人」と呼んでいる。この人が何年か全開きをしていると、その周りに半分くらい開く「半開きの人」が2、3人できる。おもしろいもので大体2、3人出てくる。この人たちは、「今日あなたの家がだめなら私の家にどうぞ」というように、全開きの人のスベアになりうる。また、「私は家を開放するのはいできないけど、あなたが何かするときは助けるわよ」という「小開きの人」は数十軒いる。皆が全開きになるのは絶対に無理だが、それぞれの分に応じて参加することができる。

世話焼きは天性の資質と申しあげたが、それは資質のある人とまったくない人がいるのではなくて、それぞれが性格の違う若干の資質をもっている●fig.10。その自分の資質にあったことをして無理をしないことが、助け合いには大事で、強制してはならない。これらは全部天性の資質で、こういう人たちを探して活かすことを私は「天性主義」と呼んでいる。

●—— 困っている人がいても、プライバシーが心理的壁になって関われないことが多い。

木原—— 面白いからくりがあって、福祉は人を助けなければいけないが、プライバシーを尊重すると、結局はその人を助けないことになる。相手の人格、プライバシーを尊重しました、でも死んでしまいましたというケースは多い。福祉の世界は、どんな状況であってもこじ開けて入ってしなくてはならない。倫理やお行儀の世界でなく、ある意味ヤクザの世界である。

先日、引きこもって「誰も来るな」と言っているおじいさんの家に入り込むことに成功した「こじ

fig.10



あけ屋」のおばちゃんがいた。どうしたかという、おじいさんの部屋で2つの押しかけサロンを開いてしまい、そこで井戸端会議をしている。男は自分からサロンには来ないが、押しかけると受け入れて、脇で見ている。いま欠けているのは、このように、困っていたらつべこべ言わずに入り込んで助けるということ。

プライバシーの尊重には、相手も必ずプライバシーを主張するというだろうという前提が含まれている。しかし、助けてほしい人はプライバシーを主張しない。主張する人は助けられ下手な人であり、助けられ上手になると言わなくなる。

●——住民流からNPOを見直すような位置づけになるか。

木原——NPOやボランティアも、相手を集めて「はい、これやりましょう」という担い手主導、関係者流になっている。NPOやボランティアは住民流を後方支援することが必要。

●——NPOは住民のなかからのニーズから組織される場合が多いが。

木原——それがあるところで外れていく。組織化というのは怖いもので、規約を決め、会議を開き、了解を得てから来年の事業はとなり、そうなる担い手主導になってしまう。男は組織化が好きである。それに対して住民はすぐに対応しなければならないので、組織化せずいつも個人行動。

●——本来はNPOもニーズがあって始めるが、組織化すると問題が出て来る。一方、個人主義は組織化・制度化できないので天性の技術的なものに頼ることになるが、これを普及させるのはむずかしいのではないか。

木原——まず当事者が相手を選ぶだけで福祉はできている。マップづくりをすると分かるが「私はあの人とあの人に助けてもらいたい」という人が必ずいる。福祉はこのように相性と天性の2つで成り立っている。福祉は困った人を助けることであり、それはいますぐに助けないとすぐに変質してしまう。世話焼きはこれを知っていて、最前線は必ず個人行動になる。そのバックアップのためにある程度の組織があるのはよい。ただその組織は、現場の人たちが柔軟に動けるようにする器量と現場への補給部隊をもつことが必要になる。現状では、組織にはニーズを知らない男がいて「勝手なことは許さん」とか「まず評議委員会にかけなくては」などと言って、ニーズを知っている優秀な女性はお茶汲みなどをしている。

●——福祉教科書自体が、制度や法律から福祉を教え始めるかたちになっている。

木原——ヘルパーの講座で、相手と個人的な人間関係をもつことが必要と言うと、教科書には相手と個人的関係になってはいけないと書いてあると言われる。しかし受け手は、1対1で相性の合うあなたがいと考えるし、もらう一方は嫌なのでお返しもする。そうした関係をこちらが認めないといけない。福祉とは、その人を満足させることでなければならない。

稲垣久和

福祉・社会保障の哲学

従来の公依存の福祉が変遷しつつある。福祉の制度が措置から契約になった。契約とは福祉利用者と福祉サービス提供者との間の契約であって、基本的に両者は対等の関係である。原則的に国家は舞台装置として背後に退く。措置制度の時代のように国家を背景にしたパターンリズムはない代わりに、今度は、舞台上の双方が対等になることの危惧も出ている。つまり、実際は、福祉サービス利用者は弱者の場合が多いから、その権利保護の面で提供者との間で対等になれないことが多いからだ。

これらの諸問題に取り組んでいくことは、今後の福祉の公共哲学の重要課題となろう。法律的に「契約関係」を是正して利用者保護の方向で、たとえば「信認関係」と呼ばれる理論も研究されている。「契約関係」においては当事者の関係は対等であったが、「信認関係」では強者対弱者のように非対等が初めから前提にされている。信認関係では受益者(利用者)の利益を図ることを受認者(サービス提供者)に義務づけている。信認関係は信頼を保護する法関係すなわち「信頼と誠実」の法関係であり、主に受認者に高度な忠実義務を課すことによって成り立っている。社会福祉のみならず社会保障全般に強い「信頼と誠実」が要請されている時代である。

ただし、それが果たして法律的レベルのみで可能かどうかは必ずしも明確ではない。多分、社会のなかにモラルまたは市民的美徳が醸成されてこなければ信認関係は機能していかないであろう、筆者はこのように考える。福祉社会の形成は、社会のなかにどうしても市民のモラル(道徳)ないしは倫理的価値の醸成を育むことと並行してなされねばならない、と。これが福祉の世界に新たに生じている課題である。

今われわれが根本的に問わねばならないのは、法律、経済や制度の問題ではなく、福祉を成り立たしめる倫理と哲学の問題である。もちろん最終的には制度設計という公共政策論に反映するにしても、その手前の公共哲学を問いたいのである。日本では、そのような基本的な議論はほとんどなされてこなかった。

例えば、神野直彦らは社会保障全般のシステムの見直しとともに、国民の参加保障型の「三つの政府」体系を提唱している。中央政府、地方政府、社会保障基金政府の3つである¹⁾。中央政府、地方政府に対して社会保障基金政府(生産の場における自発的協力の政府)を立てるところが新しい。「社会保障基金政府」は老齢、疾病、失業などの正当な理由で賃金を喪失したときに、賃金代替として現金を給付する「政府」である。基本的には筆者はこの「三つの政府」の構想に賛同するが、そのうえで、日本と北欧などとの歴史的・文化的差異を考慮したときに、今後の日本では、強い市民社会をつくる手立てを同時に入れるべきであると考えている。そうでなければ、議論は税の高負担の是非といった技術論に転化し、あとはイデオロギー論争に終始するだけである。

これは制度の問題ではなく倫理学、哲学の問題である。そのためにも、参加保障型というときの「参加」をもっと強調したい。もし、高福祉をつくりたいのであれば、市民自ら市民社会をつくる自治の気概をもって参加しなければならない。それは市場参加と同時に政治参加である。民主主義の意識のあり方を変えなければならないのである。そして政治参加のためには、労働市場にすべてのエネルギーを吸収されない、新たな「存在と時間」の哲学が必要である。

1 | 例えば、神野直彦・宮本太郎編『脱格差社会への戦略』(岩波書店、2006年) 189頁。

経済と倫理

アメリカ流の経済の世界では「連帯経済」という発想がない。市場経済のみに強調点がおかれた風土では、「効率」や社会全体の「効用」のようなものが基本の考え方となる。そのために、たとえ倫理学者によって「正義」「共通善」という物差しが導入された場合でも、いざ法的規制をしようとしても、(今日にみられるように)金融資本主義の暴走のような状態に歯止めがかからない。「共通善」による社会的連帯は絵に描いたモチのようなものになってしまう。実際、「連帯」というものは「善」や「徳」を超えて、人と人とを結びつける「友愛」がなければ機能しないのではないだろうか。「善」や「徳」は道徳概念であり、「義務」のような感覚でもお茶を濁せるが、「友愛」は心からそのような思いをもたねば成り立たない。

そもそも市場経済の成立の歴史からいって、外的な善の概念が社会的効用と結びつけられた発想に問題があった(功利主義)。財やサービスの貨幣との交換は、顧客に欲求の充足を与える。個人の欲求充足は満足感を与えるにしても、その集積(単純な足し算)という図式が社会的効用(utility)を生み出すとは考えにくい。欲求充足→満足感→単純系の集積=社会的効用という図式の最後は「経済的意味」であり、中間の個人の満足感、幸福感や喜びは「倫理的意味」に近いし、最初の欲求充足は「生理的意味」であるかもしれない。それらはリアリティー(実在)のレベルが異なる内容であり三者の間に直接の関連はない^{●2}。

しかも「幸福」(アリストテレスのエウダイモニア)を説いたギリシア的倫理学で「善」の範疇に属する「徳」の概念は、現代では多角的に異なっていることは自明であり、均質ではない。したがって最大多数の最大幸福を、個人の効用の均質な集積の最大化ということですませることはとうてい不可能である。新古典派経済学の発想は、なんら倫理を取り込むことはできないのである。ギリシア倫理学でも究極の善ないしは最高善とは、宗教的神の概念であり、幸福が究極において宗教にも関係することを鑑みれば、経済学は幸福概念を究極の一手手前で止めた理論しか扱えない。その点で塩野谷祐一の『経済と倫理』^{●3}は意欲的な大作ではあるが、経済学と倫理の接点に「善」をおく点で、納得のいくアプローチではない。

つまり経済学は、善や幸福に関しては相対的な概念しか扱えない。究極の善や幸福は均質な集積不可能なのであるから、数理的扱いは不可能である。したがって経済学という個別科学は「人びとが必要としている財やサービスを欲求に合わせて効率的に分配する」というレベルのことしか言えないし、それでよい。

むしろ現代では環境問題を考慮すれば、温暖化ガスを排出するようなやり方は環境負荷が多すぎて「極めて非効率」なのである。「効率的な配分」とはすなわち、「人びとの欲求」をセーブするモラルある生き方(欲求の反対概念である節制)を促すことである。これは道徳的、倫理的課題であろう。今日、経済学と倫理の接点に「善」をおくのは、たとえ隠喩的表現であったとしても混乱のもとである。

「正義の倫理」と「ケアの倫理」の比較

ケアの倫理が社会哲学として定式化される根拠はなにか。それは塩野谷の主張するような「卓越(perfection, excellence)」といった概念ではなく、「友愛」であることを主張したい。「卓越」は人間のプライドを想起させやすい言葉であるが、人間存在の根底にまで下るならば、「愛」こそが人びとを支えると思うからである。それを説明するために「ケアの倫理」が導入された経緯をみてみよう。フェミニズム運動のジェンダー・フリーが提起した「平等と差異」をめぐる論争は、道徳哲学のレベルにおいて「正義」の倫理とは異なる「ケア」の倫理を生み出した。キャロル・ギリガンは、伝

- 2 | 稲垣久和「宗教と公共哲学——生活世界のスピリチュアリティ」(公共哲学叢書6) 東京大学出版会、2004年、73頁。
3 | 塩野谷祐一「経済と倫理——福祉国家の哲学」(公共哲学叢書1) 東京大学出版会、2004年

統的に女性の美德と見なされてきた家庭における献身的な「ケア」の倫理に注目した。それが男性の発想である「正義」の倫理と比べて、まったく異なるものであると主張した⁴。男性は自己を他人から独立、分離、区別された人格と考え、個々人の領域間衝突を避けるために、誰にでも適用される共通のルールによって他人との共存をはかる。つまり、男性の考える道徳は正義である。

それに対して、女性は自己を社会の人間関係のなかで存在するものであり、他人は自己の可能性を支援してくれるものであると考える。ギリガンのいうケアとは、他人のニーズに応え、他人の状況に則応して行動することである。ケアの倫理は義務、コミットメント、責任、信頼、誠実といった個人間の特殊な結びつきを基礎とした倫理であるという。

よく知られたコールバーグの道徳発達理論によれば、人間は子どものころ、親から教えられる他律的な道徳に本能的に従うことから始まって、次に集団における仲間内の道徳に適合的に行動し、最後に、普遍的な道徳原理を自主的に採用する段階まで発達を遂げる。この枠組みに従えば、女性のケアの倫理は、いわばまだ第二段階にとどまるものとして低く評価される。そこで、フェミニズム倫理学は、女性をケアの仕事に閉じ込める因習から解放せよと叫ぶ。

しかしギリガンは道徳発達理論を男性の一面的な論理と考え、女性の発達論理は異なる論理をもつと主張する。他人のニーズを受け入れ、他人を世話し、他人に配慮するという責任志向の倫理は、権利志向の倫理と並んで「もう一つの声」として一般化されるべきだという。倫理を発想するスタイルとしては、正義の倫理は孤立した抽象的個人の見地に立ち、普遍的原理を結論するが、ケアの倫理は具体的状況における対人関係を前提として、奉仕と同情にもとづいた判断をする。どちらも道徳原理である限り、他人の立場に立つという普遍化可能性を満たさねばならないが、正義の倫理が「一般化された他人」ないしは「見知らぬ人」との立場の交換から導かれるのに対し、ケアの倫理は「具体的な他人」ないしは「顔見知りの人」との立場の交換から導かれる⁵。正義の原理はしばしば「法律」として立法化され、強制力を発揮する。

高齢者や障害者の介護、育児サービスなどのケア・サービスの社会化は、女性が伝統的に担ってきた家庭内の無償労働からの解放と、介護・育児などのサービスの社会的提供という二重の機能を担うことになる。その際、女性を家族のケアから解放する倫理と、社会がケアを受け取る倫理とが対応しなければならない。すなわち、家族に対するケアの観念から、見知らぬ人びとに対するケアの観念への普遍化が必要である。こうして初めて、女性に無償労働の負担を強制してきたケアの倫理学は、普遍的な原理として、正義の倫理学と対等な地位につくことができる。ただしこの場合の「普遍化」は、条件付きの普遍化であることに注意すべきである。家族によるケアが社会保障によるケアと類比的なのは、家族内の愛情が人類愛と類比的なのと同様である。

塩野谷の場合は、ここで、徳のなかでも「卓越」に注目し「卓越の倫理学」を社会保障論の徳の倫理学として提示する。しかしこれが、「家族愛と人類愛が類比的な」根拠としていわれているのは、納得しがたい。というのは卓越には、塩野谷自身がいくらエリート主義とは無縁とはいっても、やはり、エリートの強者の倫理の面が残るからだ。むしろ「家族愛と人類愛が類比的な」根拠として、弱者をも包含する「ケアの倫理」を探るべきである。上昇的な強者の論理ではなく、下降的な弱者の論理の構築である。

愛の諸相

そのためにわれわれは、「愛の諸相」について見て、なおギリシア倫理学に残る存在論的な問題点を克服しつつ現代に生かしていこうと思う。愛が必ずしも弱者にのみ向けられてきたので

4 | キャロル・ギリガン『もうひとつの声——男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』（岩男寿美子訳）川島書店、1986年

5 | ネル・ノッディングス『ケアリング—倫理と道徳の教育 女性の観点から』（立山・清水・新・林・宮崎訳）見洋書房、1997年、および、稲垣久和『キリスト教公共福祉とはなにか』（『共立パンフレット 4』共立基督教研究所、2008年）

はない、という点も踏まえつつ。

英国の文学者C・S・ルイスが「四つの愛」というエッセーを書いている⁶。まずは「男女の愛」、次に「家族の愛」。これらはごく自然的な愛である。次に「友愛」があるがこれは互いにある努力を必要とする。そして最後に「神の愛(アガペー)」である。実は、これらの愛の区分は、西洋倫理学のスタートであるギリシアの時代から議論されてきた。ただ、アガペーはギリシア語ではあるが、主としてギリシア哲学とは別の伝統の新約聖書の用語で、キリスト教の重要な概念である。古代倫理学では、プラトンはエロース、アリストテレスはフィリアというギリシア語を用いて「愛」について論じている。では、今日の社会保障論、社会福祉との関係でこれらの伝統はどう再構成されるのであろうか。

「家族愛と人類愛が類比的な」根拠を見るためには、私的領域について、つまり「公共圏」の手前にある「親密圏」について十分に理解しておかねばならない。そこで訓練されるモラル(道徳)というものを身につけることが先決だ。その準備なしに「愛」について公共の場で語り、社会保障論の根拠としていくことは、混乱のもとになる。それこそせつかくの「人類愛」概念が、「国を愛せ」とか「愛国心」といった陳腐な方向に利用されかねない。実は、プラトンの愛(エロース)にすでにその危険が胚胎されていたのだ。

プラトンは『饗宴』で愛(エロース)について語っている。エロースは「それが引き起こす競争のゆえに人間にとっても、国家にとってももっとも有益なもの」(パイドロス)である。ここからソクラテスは「エロースの真理」「愛の真理」を語ろうとする⁷。それは、すべての愛は、それが欲望している、つまりはそれに欠けているなにかへの愛である⁸。エロースとは欲望であり、欲望とは欠如である。ソクラテスによれば「現にないものを欲求するのであり、自分がもっていないもの、自分自身そうでないもの、自分に欠けているもの、これが欲求と恋の対象をなしている」(『饗宴』200E・9)。このようにエロースには危険な面が付随している。仏教でいう「執着」に近いであろう。

プラトンの存在理解には時間から超然として、時間を無視したところがある。プラトンのエロースが向かう対象は善それ自体であり、この世のものではない(イデアの世界)。つまり生成の世界、時間の世界のなかにはなく無時間的な永遠の世界のなかにある。エロースとは相対的にいえばより善きものの追求、絶対的にいえば完全存在の追求である。完全性の尺度の一つに永遠の持続がある。「いつまでも変わらぬ同じもの」ということが、真実の存在への接近の第一歩ということになる。時間という観点ではなく、永遠という観点からできているプラトンのエロースは、エロースの向かう対象になんの責任も負わない。永遠な存在には責任は不要である。人間に責任の感情が出てくるのは、むしろ有限の存在、滅びゆく存在に向かうときである⁹。

エロースの対象の向かう相手は異性、学問、国家、金銭等々である。特に社会性との関係では、エロースが金銭に向かうとき、市場原理主義が出現する。あくなき自己利益追求の欲求である。その欲望は金融資本主義の今日、際限もなく肥大化する。これはやがて自己と同時に他者をも破壊していく危険性を秘めている。

友愛(フィリア)

プラトンのエロース(愛)に対して、アリストテレスのフィリアは「友愛」と訳されてよい概念である。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』において、四徳すなわち、智恵(思慮深さ)、勇気、節制、正義を語ったあとに、第8、9章においてフィリア(友愛)について語っている。もしアリストテレス倫理学を参考にするのであれば「卓越」よりも「友愛」のほうが人びとを支える倫理となるであろう。エロースが欠如への渴望だとすればフィリアは「享受し喜ぶ能力」であり、エロースに還元されない人びとの間の愛であり「互いに相手に対して好意をいだき、相手のために善いことを

6 | C・S・ルイス『四つの愛』(C・S・ルイス宗教著作集 2、蛭沼寿雄訳)新教出版社、1977年

7 | 『饗宴』199B (『プラトン全集 第5巻』鈴木照雄訳、岩波書店、1974年、68頁)。

8 | プラトン前掲書、199D-200B (68-71頁)。

9 | プラトン前掲書(72頁)。

10 | ハンス・ヨナス『責任という原理』(加藤尚武監訳)東信堂、2000年、214頁 (原書Hans Jonas, Das Prinzip Verantwortung, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1979)。

願う」¹¹。たとえ恋人どうしの愛であってさえも、エロースで汲み尽くされることはなく「相手の人柄を大切に思うようになる」であろうし¹²、ましてや夫婦の愛では「互いに相手の美德をおのれの喜びとしている」¹³ことがなければ、結婚生活は遠からず破綻するであろう。夫婦の愛のみならず、フィリアは親の子どもへの愛であり、子の親への愛であり、兄弟愛である。さらには家族愛を超えて「おのれの友人たちを愛するがゆえに、彼らの幸福を願う」のがフィリアである。筆者の考えでは、ここから「家族愛と人類愛が類比的な」根拠としての「責任」という概念が出てくる。ただしアリストテレスの形而上学的存在論は克服されなければならない。

「責任」こそが市民社会のモラルとしての「連帯」の基礎になる。ハンス・ヨナスは、責任の概念を倫理学の中心におこうとするときに、親の子どもへの愛(=慈愛)、特に赤子の「存在」との類比を使っている。これは卓見である。しばしば存在(である)から当為(すべし)への転換の困難さが倫理学の課題になるが、生れたばかりの赤子の存在はこれを解消する。つまり、無条件に親の「世話をすべし」という当為の感情をさらに通り越して、「世話したい」「世話せずにいられない」という感情を呼び起こすからだ。生れたばかりの赤子は確かに細胞体の集合として目の前に存在しているに過ぎない、とみるのは科学の目である。道徳や倫理を科学の還元主義の外側に位置づけなければならない。これは筆者の提唱する創発的解釈学の実在の階層性からすれば当然のことである¹⁴。

親は、赤子への世話(ケア)を無条件に引き受けるであろう。赤子はそのままに放っておけば死んでしまう。弱者中の弱者だ。その滅びゆく存在に対して、親は無条件に責任を果たすのである。親は赤子の「顔を見ながら」無条件に責任を果たす。なぜか。愛(フィリア)、慈愛があるからである。これを赤子のほうからみれば、赤子は無条件に親の恩恵を受ける。ここには愛にもとづく「責任」と「恩恵」の非対称が存在している。親は赤子への責任を果たすときに、赤子からの見返りを期待しない。この場合の責任は対等の取引や契約から生じているのではない。有限で滅びゆくものへの無償の愛や慈しみから生じた責任である。ギリシア的な「徳」ではなくむしろ「責任」概念が倫理学に入ってくるときの原型がここにある。

このような親の責任から受けた赤子の恩恵は、一方的であり無償の愛から出る。「ケアの倫理」はここに基礎をもっている。赤子はこの恩恵を、今度は、責任として返すであろう。しかし誰に返すのか。実は、この恩恵を返すべき相手は、自分が親になったときに自分の生んだ赤子に返すのである。このように、責任と恩恵とは世代を継承して返されていく(世代間倫理)。ここでの感覚は「生かされている」ことへの恩恵と責任である。人と人とのなかで「顔と顔とを見合わせて」生かされているパーソナル(人格的)な感覚である。自分なぜ生かされているのか、という問いである。これは無時間の倫理学ではなく、時間のなかの倫理学である。従来の西洋倫理学を私的領域ないしは親密圏だけでなく、公共圏においても大きく転換していく糸口がここにある。それは「善-徳」の無時間的で実体論的な道徳の概念から、友愛にもとづく「恩恵-責任」の時間的でパーソナルな関係論的倫理学の概念への転換である。この場合の「恩恵」は、環境世界も含む他者から受ける恩恵であり、「責任」は他者への責任である。

西洋倫理学は存在を基礎にすえた「徳」の倫理学から、やがて「契約」の倫理学へと変化していくが、いずれにしても無時間的で「同時代的」である。近代の市民社会論で重要な役割を果たす契約概念も同時代人の間での契約である。まだ生まれていない歴史の未来の世代、つまり将来世代は契約の外にいるし、過去の世代も契約の外にいる。しかし、今、われわれが直面している倫理学は地球生態系の有限性、自然資源の有限性を視野に入れた倫理学でなければならない。このときの倫理学は時間のなかの倫理学、世代間の倫理学でなければならないのだ。

こうして、人間関係において、善(good)にもとづいた徳(virtue)と同時に、恩恵(grace)にもとづい

11 | 「ニコマコス倫理学」第8巻2章 1155a4-5 (『アリストテレス全集 第十三巻』加藤信朗訳、岩波書店、1968年、254頁)。

12 | アリストテレス前掲書、8・4・1157a11 (259頁)。

13 | アリストテレス前掲書、8・12・1162a15-33 (259頁)。

14 | 稲垣久和『宗教と公共哲学』72頁。

た責任(responsibility)、これこそが21世紀倫理学において真剣に考えられるようになるであろう。「卓越」という徳の倫理は上昇志向的であるが、愛として「友愛」にもとづく倫理は弱者、減びる者に仕えていく下降的の倫理である。「家族愛と人類愛が類比的な」根拠はここにある。公共の場でも、共通善(common good)と同時に共通恩恵(common grace)という概念が重要になってくるであろう。

このような「ケアの倫理」は人と人との深いつながりがあるところ、すなわち「顔見知りの人」の集まりのコミュニティといった比較的小さなレベルの共同体、国家や地方政府よりもはるかに小さな共同体のなかでこそ有効な倫理である。この倫理は普遍的であるが、一元的に同質な仲間に押しつける倫理ではない。グローバルな市場主義、中央政府の官僚制的福祉国家に慣れた現代日本人の福祉感覚には、回復していくのは至難の技であろうが、その倫理的エトスを磨く努力が、特に教育の世界において、どうしても必要だ。

「ケアの倫理」は「いのちへの慈愛」にもとづく非対称の倫理である。親の子への慈愛は大人世代の子供世代への慈愛へと類比的に拡大される。また、赤子が親から受けた慈愛の恩恵を、今度は、責任として返す相手は、自分が大人になったときに自分の生んだ赤子に返す世代間倫理があるが、同時に「親世代」へ類比的に返す可能性もある。これが友愛に促されて社会化すれば高齢者ケアとなる。これは「親孝行」といった互酬性にもとづく伝統的道德律とは異なっている。高齢者ケアは「親孝行」との類比概念ではなく、コミュニティ形成の共通恩恵から出てくる「責任」概念の一つである。

このように「ケアの倫理」は、アリストテレスの友愛さらにそれを超えてキリスト教の隣人愛、仏教の慈悲、儒教の仁愛に匹敵する社会的行為であり、人類にとってもっとも高度な倫理である。しかし一元的にではなく多元的に働く。「家族愛と人類愛が矛盾しない」根拠はここにある。ただし、最大の問題は市場原理にそぐわないということであろう。それは当然であろう。市場原理は「欲求充足」によって機能しているのであるから、「欲求のコントロール」「節制」を説く道德・倫理にはそぐわないのである。しかし、環境への配慮はいうまでもなく、人間の経済活動は、市場原理だけで営まれているわけではない。

たとえば、ケアは経済的にはサービス産業として市場的対価にかなう部分がある。それと同時に、協同組合的な友愛にもとづく連帯経済に属する部分と、さらに純粹にスピリチュアルな行為、すなわちアリストテレスの友愛からキリスト教の隣人愛、仏教の慈悲、儒教の仁愛に匹敵する社会的行為の部分があること、これを理解することである。このように「ケアの社会化」には経済、法-政治、道德、倫理、宗教の多層的な人間の営みがかかわってこざるをえないのである。同時に、地域ないしは近隣コミュニティとして、その規模を比較的小さく取らなければ十分に機能しない、この点にも注意を払うべきである。

Emergence

Volume XIII | number 01

| 発題・執筆者 |

柳瀬 敬[やなせ・たかし]

NPO法人自然生クラブ施設長。1958年、愛媛県今治市生まれ。筑波大学卒業後、1981年より私立白根開善学校(群馬県)の学校づくりに参加。90年、茨城県の筑波山麓に知的ハンディキャップをもつ人々と農的生活を基盤にした共同生活寮「自然生クラブ山の家」を立ち上げ、環境運動としてコミュニティー農園を運営する。また、クラブのメンバーによる即興ダンス、太鼓などの表現活動を行い、各国での海外公演や交流を行うほか、地域の石蔵を活用した田井ミュージアムを拠点とするアート活動なども展開している。

小川巧記[おがわ・たくのり]

コンセプト・ディレクター、クリエイティブ・ディレクター。1967年NHKアート入社。その後、広告企画、ドキュメンタリー番組の構成・演出などを経て、87年にビッグバン・ハウス株式会社を設立。広告や博覧会をとおして、市民・企業・行政を結ぶコミュニケーション・プランニングを行う。愛知県地域づくり洋上セミナー、早稲田エイジングメッセなどのプロデュースを手がけ、2005年の愛・地球博では市民参加プロデューサー、2009年の横浜開港150周年記念テーマイベントでは総合プロデューサーを務める。98年日本広告主賞「消費者のためになる広告」金賞受賞。共著書に「万博を創る」(国際博覧会協会)「地球大交流」(東急エージェンシー)などがある。

木原孝久[きはら・たかひさ]

早稲田大学第一政治経済学部卒業。福祉施設勤務、福祉医療雑誌記者等を経てフリーに。他方、1974年に福祉教育研究会を創設(後に「住民流福祉総合研究所」と改名)、三十数年にわたり住民流の福祉のあり方を追い求め、月刊誌「住民流福祉」や福祉関連マニュアルを発行するほか、研究会やセミナーを開催。著書に「住民流助け合い起こし」(住民流福祉総合研究所)「福祉の人間学入門」(本の泉社)「助けられ上手さん」『わたくし流ボランティアのすすめ』(ともに中央法規出版)ほかがある。

稲垣久和[いながき・ひさかず]

共立基督教研究所長、東京基督教大学教授。専攻はキリスト教哲学。東京都立大学大学院博士課程修了。アムステルダム自由大学哲学部・神学部研究員、同客員教授を歴任。著書に「宗教と公共哲学——生活世界のスピリチュアリティ」(東京大学出版会)「靖国神社「解放」論——本当の追悼とはなにか?」(光文社)「国家・個人・宗教——近現代日本の精神」(講談社現代新書)「公共福祉という試み——福祉国家から福祉社会へ」(中央法規出版)ほかがある。

Emergence | 創 発

Volume XIII

number 01

2010年3月31日

発行人 | 稲垣久和

編集 | 高橋伸幸

編集協力 | 岡田早穂・戸井田絵美

デザイン | 森大志郎

表紙イラストレーションプログラム | 中村泰之

印刷 | PRINT BANK

東京基督教大学 共立基督教研究所

〒270-1347

千葉県印西市内野3-301-5-12

telephone 0476.46.1137

facsimile 0476.46.1292

E-mail kci@tci.ac.jp

<http://www.tci.ac.jp/research/kci.html>

Emergence | 創発の定期購読・バックナンバーの

ご注文は当研究所まで(Ⅰ-Ⅸ巻までは

『共立研究』の旧称で発行)。

1部 = 200円(合併号は400円)・送料別

定期購読料(1巻3冊分) = 800円・送料込

For even the Son of Man did not come to be served, but to serve, and to give his life as a ransom for many. [Mark 10:45]